三重県埋蔵文化財調査報告 133-2

瀬干遺跡・綾垣内遺跡
大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

瀬干遺跡（南東上空から）

例　　言

1　本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

瀬干（せほし）遺跡	松阪市櫛田町字瀬干・一ノ坪
綾垣内（あやがいと）遺跡	松阪市櫛田町字綾垣内・極原・柳辻
大蓮寺（だいれんじ）遺跡	松阪市櫛田町字大蓮寺・粟田・塔ノ本
柳辻（やなつじ）遺跡	松阪市櫛田町字柳辻
北ノ垣内（きたのがいと）遺跡	松阪市櫛田町字北ノ垣内・塚本

なお、平成７年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査全体の調査経過および協議遺跡一覧は、第１分冊に掲載した。

2　本書は、平成７年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第２分冊である。

3　調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元市町村が負担した。

3　調査および整理の体制は下記による。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課
整理担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課・管理指導課

4　調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、同部農村振興課、各農林水産事務所、各土地改良区および地元の方々、各市町村教育委員会に協力をいただいた。

5　各遺跡の報文執筆は基本的に現地調査担当者があたり、その名を目次および文末に明記した。

6　本書の方位は、真北を用いた。なお、磁針方位は、調査地において西偏６度20分（平成３年、国土地理院）である。

7　本書で用いた遺構表示記号は、下記の通りである。

ＳＫ＝土坑　　ＳＤ＝溝

8　本書で報告した記録類や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

巻頭写真図版

例　　言

目　　次

Ⅰ．位置と環境 …… （袖岡直樹）…… 1

Ⅱ．瀬干遺跡 …… （宇河雅之）…… 6

1．はじめに …… 6

2．層序 …… 6

3．遺構 …… 8

4．遺物 …… 10

5．結語 …… 12

Ⅲ．綾垣内遺跡 …… （袖岡直樹）…… 17

1．はじめに …… 17

2．層序 …… 20

3．遺構 …… 20

4．遺物 …… 23

5．結語 …… 23

Ⅳ．大蓮寺遺跡 …… （宇河雅之）…… 30

Ⅴ．柳辻遺跡 …… （宇河雅之）…… 33

Ⅵ．北ノ垣内遺跡 …… （宇河雅之）…… 34

挿　　図

Ⅰ．位置と環境
第１図　遺跡位置図（１：25,000）…… 1
第２図　遺跡地形図（１：　7,500）…… 3

Ⅱ．瀬干遺跡
第３図　調査区位置図（１：2,000）…… 6
第４図　Ｂ地区（西壁）土層断面図（１：50）…… 7
第５図　遺構平面図（１：400）…… 7
第６図　ＳＸ２・５周溝土層断面図（１：40）…… 8
第７図　方形周溝墓（ＳＸ２・３・４・５）遺構平面図（１：100）…… 9
第８図　ＳＸ２遺物出土状況図（１：20）…… 10
第９図　方形周溝墓出土遺物実測図（１：4）及び出土位置図…… 11
第10図　方形周溝墓形態変遷模式図…… 12

Ⅲ．綾垣内遺跡
第11図　調査区位置図（１：2,000）…… 17
第12図　遺構平面図（１：200）…… 18
第13図　調査区北壁土層断面図（１：100）…… 19
第14図　ＳＤ５北壁土層断面図（１：50）…… 20
第15図　出土遺物実測図（１：4）…… 22
第16図　伊勢国飯野郡櫛田村全図〔部分〕（１：6,000）…… 25

Ⅳ．大蓮寺遺跡
第17図　調査区位置図（１：2,000）…… 30
第18図　遺構平面図（１：200）…… 31
第19図　調査区南壁土層断面図（１：80）…… 31
第20図　出土遺物実測図（１：4）…… 31

Ⅴ．柳辻遺跡
第21図　遺構平面図（１：200）…… 33
第22図　ＳＤ１・２土層断面図（１：40）…… 33

Ⅵ．北ノ垣内遺跡
第23図　調査区位置図（１：2,000）…… 34
第24図　Ａ地区遺構平面図（１：200）…… 35
第25図　Ａ地区西壁土層断面図（１：100）…… 35
第26図　ＳＫ４・５遺物出土状況図（１：20）…… 35
第27図　Ｂ地区遺構平面図（１：200）…… 36
第28図　Ｂ地区（南壁）土層断面図（１：100）…… 37
第29図　Ｂ地区ＳＤ２・３・４・８・ＳＫ９遺構実測図（１：80）…… 38
第30図　ＳＫ９遺物出土状況図（１：20）…… 38
第31図　出土遺物実測図（１：4）…… 39

写 真 図 版

Ⅰ．位置と環境
写真図版１　櫛田地区航空写真（極東米軍機撮影）…… 5

Ⅱ．瀬干遺跡
写真図版２　Ｂ地区から神山を望む（北から）…… 13
Ａ地区調査区全景（東から）
写真図版３　方形周溝墓群全景（東上空から）…… 14
ＳＸ２壺出土状況（陸橋部南側周溝）
写真図版４　ＳＸ２北側周溝遺物出土状況（北から）…… 15
ＳＸ２北側周溝遺物出土状況（東から）
ＳＸ５北側周溝遺物出土状況（北から）
写真図版５　出土遺物 …… 16

Ⅲ．綾垣内遺跡
写真図版６　調査区全景（東から）…… 26
Ｂ・Ｃ地区全景（東から）
写真図版７　ＳＤ５（西から）…… 27
ＳＤ13・14・15（西から）
写真図版８　出土遺物 …… 28
写真図版９　出土遺物 …… 29

Ⅳ．大蓮寺遺跡
写真図版10　調査前風景（東から）…… 32
調査区全景（東から）

Ⅵ．北ノ垣内遺跡
写真図版11　Ａ地区調査区全景（東から）…… 40
Ｂ地区調査区全景（東から）
Ｂ地区調査区西端遺構群（西から）
写真図版12　Ａ地区ＳＫ４遺物出土状況（東から）…… 41
Ｂ地区ＳＫ９遺物出土状況（西から）
出土遺物

表

Ⅱ．瀬干遺跡
第１表　出土遺物観察表 …… 11

Ⅲ．綾垣内遺跡
第２表　出土遺物観察表 …… 24

Ⅵ．北ノ垣内遺跡
第３表　出土遺物観察表 …… 39

Ⅰ. 位置と環境

瀬干遺跡（1）、綾垣内遺跡（2）、大蓮寺遺跡（3）、柳辻遺跡（4）、北ノ垣内遺跡（5）は、いずれも松阪市櫛田町に所在する。一帯は田園風景の広がる市東部の穀倉地帯で、櫛田川下流左岸の沖積平野中に位置している。

櫛田川[1]は、三重・奈良両県境の高見山に源を発し、松阪市松名瀬町で伊勢湾に流入する、延長約84kmの南勢第二の河川である。上・中流部では中央構造線沿いに曲流し、河岸段丘を形成しながら東進している。下流部に至り、神山（松阪市山添町）東南麓のJR紀勢本線鉄橋付近から二手に分かれて伊勢平野へと流れ出る。一方は本流として北進し、他方は祓川となって北東に向かう。

櫛田川下流部の地形には、幾度となく繰り返された氾濫の歴史が刻まれている。旧河道の痕跡を残す畦畔や発達した自然堤防などが、現河道と祓川との間で乱流を続けた櫛田川の姿を物語る。なお、かつて櫛田川の本流であった祓川から現河道への移行は、永保2年（1082）7月の地震と暴風雨によるものと考えられている[2]。

第1図　遺跡位置図（1：50,000）　（国土地理院・松阪・1：25,000）

歴史的環境

では、櫛田川下流域とその周辺の主な遺跡を通して、歴史的環境を概観してみる[3]。

(1) 旧石器時代～縄文時代[4]

下流の上寺遺跡[5]（6）でナイフ形石器の出土があるものの、当初、人々の生活の中心は上・中流域であったようである。しかし縄文中期ごろから徐々に遺跡分布が拡大し始め、後期～晩期には次第に下流へと中心が移ってくる。明野原台地西端の金剛坂遺跡[6]（7）など、祓川右岸に展開するようになり、やがて新しい時代を迎える。

(2) 弥生時代

前期の遺跡としては、櫛田川左岸の上寺遺跡、金剛川左岸の那知山遺跡（8）、前代から続く拠点集落・金剛坂遺跡などがある。いずれも第Ⅰ様式新段階の遺物が出土している。

中期には、金剛川左岸の段丘低位面に集落が営まれる。中世古遺跡（9）、涌早崎遺跡[7]（10）などである。涌早崎遺跡では銅鐸形土製品が出土した。

後期になると、遺跡数が増え、分布範囲も広がる。櫛田川左岸では、現在松阪商業高校のある丘陵上や朝田寺付近の氾濫平野に、生活のあとが見られる。前者は浅堀木遺跡（11）や天王山遺跡（12）などで、後者は袈裟襷文の銅鐸形土製品が見つかった堀町遺跡[8]（13）である。また、金剛川左岸の台地中位面には環濠集落・杉垣内遺跡（14）が、右岸沖積低地中の低平台地には大集落・草山遺跡[9]（15）が出現する。草山遺跡では方形周溝墓が28基検出された。

方形周溝墓については祓川右岸でも、金剛坂遺跡で14基、寺垣内遺跡[10]（16）で25基、中～後期のものが見つかっている。この2遺跡はパレススタイルの壺が出土したことでも知られている。そこから少し上流の櫛田川右岸にある上ノ垣内遺跡[11]（17）では、前方後方型周溝墓が造られており、本格的な古墳時代の到来を予感させる。

(3) 古墳時代[12]

前期古墳は櫛田川左岸地域に営造される。まず4世紀後半に久保古墳（18）が、次いで同末に坊山1号墳（19）、高田2号墳（20）、茶臼山古墳（21）が造られた。これらはすべて円墳であり、この地域の特色と言えよう。また4基とも銅鏡が副葬されており、墳丘規模も大きいことから、この時期、櫛田川左岸には有力な諸集団がいたと考えられる。

5世紀代にはいると、右岸地域にも有力集団が現れたようである。5世紀前半の方墳、権現山1・2号墳（22）に始まり、同後半、神前山1号墳[13]（23）、大塚1号墳（24）、高塚1号墳（25）などの帆立貝式古墳が玉城丘陵上に築造される[14]。このころの左岸地域は、その古墳分布の状況から、諸集団がひとつに統一されていたと考えられ、5世紀後半には櫛田川をはさんで二大勢力が存在したことになる。

6～7世紀の古墳は、縮小化・群集化するようになる。櫛田川両岸の丘陵上に、天王山古墳群（26）、中万大谷古墳群（27）、河田古墳群[15]（28）、大日山古墳群[16]（29）ほか数多くの古墳群が造られ、やがて終末を迎える。

ところで古墳時代の人々はどこに住んでいたのだろうか。櫛田川左岸の射原垣内遺跡（30）、上寺遺跡などのほか、櫛田川と祓川との間の乱流地域でも、自然堤防上に高畑遺跡（31）などがある。

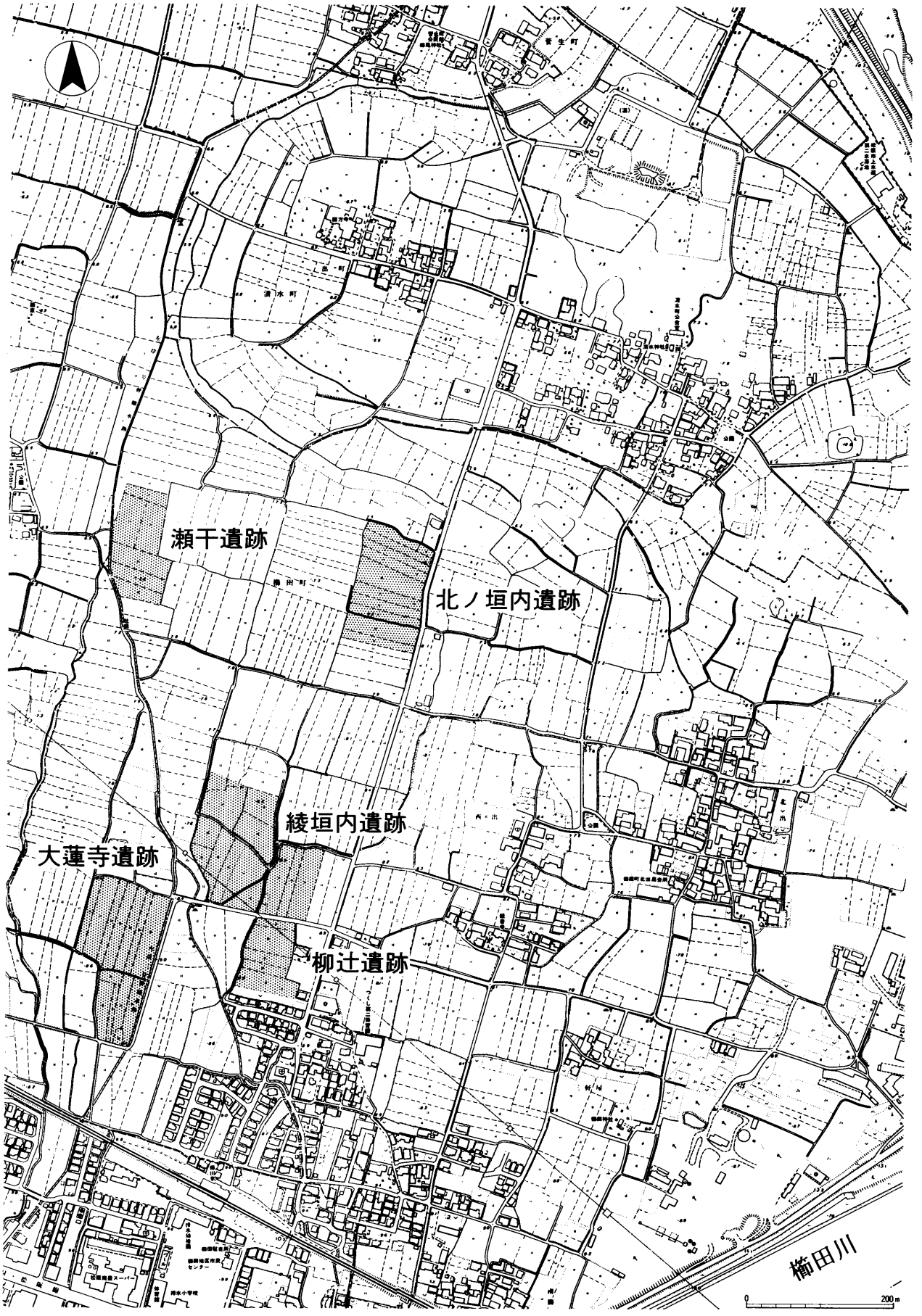
(4) 歴史時代

天照大神の御杖代として未婚の皇女が伊勢神宮に奉仕する斎王制度は、天武朝には確立し、南北朝時代まで600年以上の長きに渡って存続した。多気郡に斎宮寮が置かれ、櫛田川は「神の近堺」であった。現在、明和町斎宮・竹川に斎宮跡[17]（32）があり、国史跡に指定されている。

仏教が隆盛した奈良時代には、櫛田川の左岸に2つの寺院が存在したと推定されている。大雷寺廃寺（33）と貴田寺廃寺（34）である。ともにかつて多くの瓦が出土したが、寺域は判然としていない[18]。

やがて平安時代に入ると、飯野・多気両郡の諸地域が東寺領として寄進されるようになる。延暦22年（803）に川合荘が、弘仁12年（821）には大国荘がそれぞれ成立した。両荘は櫛田川下流域に散在し、当時、東寺が持っていた荘園の中でも特に重要なものであった。しかし、神三郡（度会・多気・飯野）の中の寺領であるために、伊勢神宮による強い圧迫を受け、さらに、度重なる櫛田川氾濫による荒廃とも相まって、12世紀には崩壊する[19]。

中世の集落跡は、これまでにも登場した堀町・草山・金剛坂・寺垣内などの各遺跡のほか、櫛田川・



第２図　遺跡地形図（１：7,500）

祓川間にある中の坊遺跡（35）や古川遺跡（36）、櫛田川右岸のカウジデン遺跡[20]（37）、左岸の山添遺跡（38）などがあげられる。その中でも山添遺跡は、北畠氏の家臣・山副氏館跡の可能性もあり[21]、背後の山頂には神山城跡[22]（39）がのこる。

後醍醐天皇崩御直後の延元４年（1339）８月には、好機と捉えた北朝方の高師秋軍が伊勢に攻め寄せて来る。北畠親房の御教書をうけた潮田幹景は神山城でこれを迎え撃ち、９月11日には立利縄手（現松阪市立田町）での戦も行なわれている。その後、興国３年（1342）に落城するまで、神山城は南朝方の重要な戦略拠点として機能した[23]。

櫛田地区について

以上、旧石器時代から中世に至る櫛田川下流域史を眺めた。ではその中にあって、川の名前の由来となった櫛田地区はどのような場所であったのか。

『倭姫命世記』[24]垂仁天皇22年癸丑条に、

「大若子命乎。汝国名何問賜。答白久。百張蘇我乃国。五百枝刺竹田之国止白支。其処尓御櫛落給支。其処乎櫛田止号給比。櫛田之社定賜支。」

という地名説話があり、式内櫛田神社・同櫛田槻本神社が鎮座する[25]。両社は度会・多気両郡の他の式内社とともに、斎宮の祈年祭・新嘗祭に預かる神社であった[26]。さらに、伊勢神宮の式年遷宮にあわせて、造宮使による修造が行なわれる12社のうちに「櫛田社」の名がみえる[27]。また櫛田神社の旧社地（櫛田町字社）の南に字「大蓮寺」、「塔ノ本」があることなどから、大雷寺を櫛田神社の神宮寺とする説もある[28]。

下って鎌倉期には「櫛田御厨[29]」「櫛田川原御厨[30]」「櫛田河原御薗[31]」などの神宮領のほか、斎宮寮田[32]の存在も知られている。

櫛田地区は、北部を中世の参宮古道が、南部を近世の参宮街道が通る地である。さらに奈良・平安期の参宮道も、近世と同一コースでこの地区を通っていたという説がある[33]。勅使が、斎王が、必ず通過した神堺の地として、神宮および斎宮との関係が注目される。

また周辺一帯は飯野郡の条里制下にあった。畦畔に条里地割の痕跡を色濃く遺し、「一ノ坪」などの字名にも名残りがある。しかし、この地割がいつできたものであるのか、現在のところ不明である。ただ、少なくとも条里のプランは、奈良時代末～平安時代初頭には存在したと考えられる[34]。

櫛田地区の歴史については、まだまだ明らかでない点が多い。が、整然たる地割の一角を破壊する旧河道に、暴れる川と戦いながら自分たちの歴史を築いてきた人々の姿が見えるようである。

（袖岡直樹）

〈注〉

1 『松阪市史』第１巻 史料篇 自然,松阪市史編さん委員会 1977年
2 西山傳左衛門 『黒部史』 松阪市立図書館 1955年
3 遺跡についての記述で特に註記なきは、主に下記の文献を参考としている。
『松阪市史』第２巻 史料篇 考古,松阪市史編さん委員会 1978年
4 『飯高町郷土史』 飯高町郷土史編纂委員会 1986年
5 下村登良男『上寺遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1981年
6 山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』 明和町教育委員会 1971年
田村陽一「金剛坂遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1985年）
7 福田 昭『涌早崎遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1992年
8 『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅴ 三重県埋蔵文化財センター 1995年
9 『草山遺跡発掘調査月報』No.１～10 松阪市教育委員会 1982～85年
10 『三重県埋蔵文化財年報』16・17 三重県教育委員会 1985・86年
11 西村修久「上ノ垣内遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告』Ⅱ 三重県埋蔵文化財センター 1996年）
12 『多気町史』通史, 多気町史編纂委員会 1992年
13 下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告書』 明和町教育委員会 1973年
14 下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告』Ⅲ 多気町教育委員会 1986年）
15 伊藤久嗣・吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告』Ⅰ 多気町教育委員会 1974年
16 西村修久「大日山古墳群」（『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告』Ⅰ 三重県埋蔵文化財センター 1995年）
17 『斎王宮跡資料』 三重県教育委員会 1978年
『斎宮跡資料選』 斎宮歴史博物館 1989年 その他多数
18 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』 楽山文庫 1933年
19 前掲註12
20 三ツ木貞夫・谷本鋭次「カウジデン遺跡」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980年）
21 新田 洋『山添遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1979年
22 『三重の中世城館』 三重県教育委員会 1976年
23 由良哲次『南北朝編年史』上, 吉川弘文館 1964年
24 続群書類従本
25 延喜神名式 （新訂増補国史大系本）
26 延喜斎宮式 （〃）
27 延喜太神宮式 （〃）
28 前掲註18
『式内社調査報告』第６巻 東海道１, 皇學館大學出版部 1990年
29 『公文抄』 （続群書類従本）
30 『神宮雑例集』（群書類従本）
31 『神鳳鈔』 （〃）
32 『吾妻鏡』文治３年（1187）５月26日条（新訂増補国史大系本）
33 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（『探訪古代の道』第１巻 法蔵館 1988年）
34 小林 秀氏の御教示による。

写真図版１　極東米軍機撮影航空写真（櫛田地区・昭和22年９月23日）

Ⅱ. 瀬干（せぼし）遺跡

1．はじめに

瀬干遺跡は、松阪市和屋町の集落東側に位置し、櫛田川左岸の沖積平野に立地する。

調査は、櫛田川左岸第二幹線水路（大雷寺川）に隣接する遺跡範囲（13,000㎡）の内、用水路部分の400㎡を対象とした。ただし、方形周溝墓の一部と考えられる溝を検出したため、遺構の性格を明確にする必要性が生じた。そこで松阪農林事務所と協議し、急遽180㎡の調査区拡張を行った。総調査面積は580㎡である。

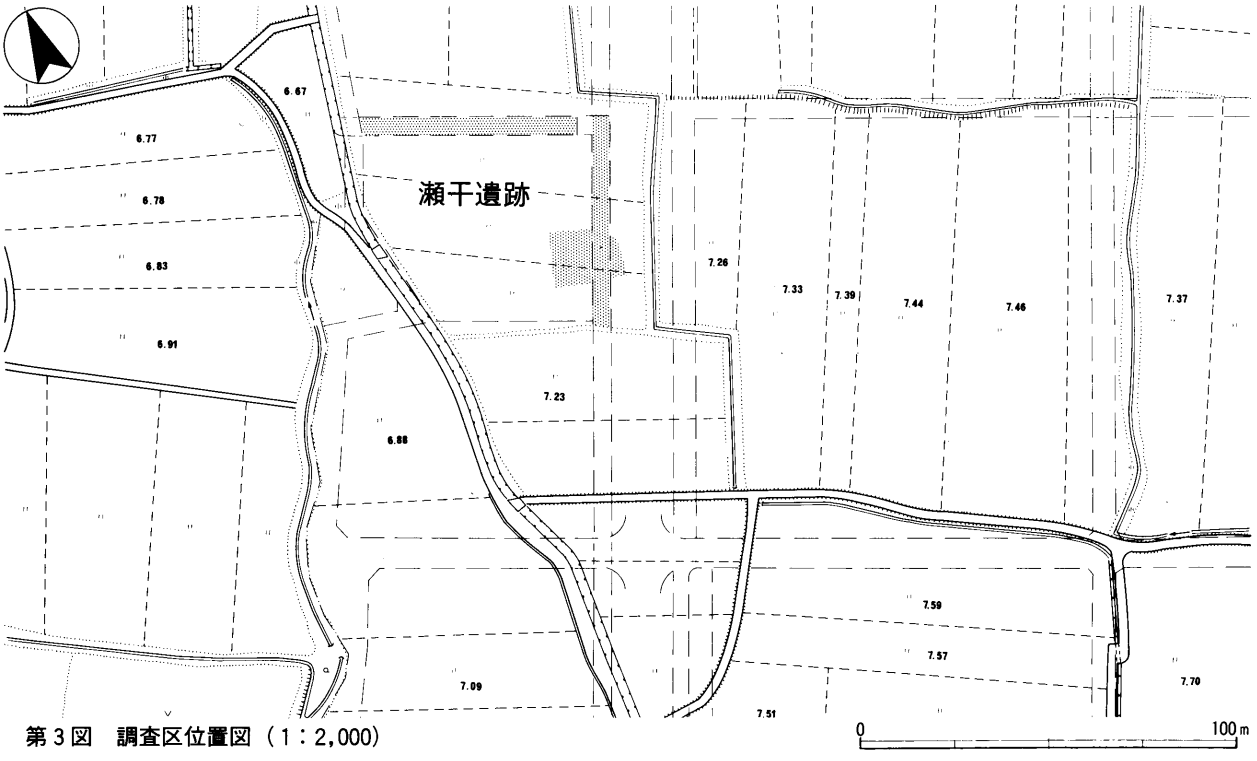
調査区は「L」字形であるため、便宜上、東西方向をA地区、南北方向をB地区として調査に臨んだ。

2．層　　序

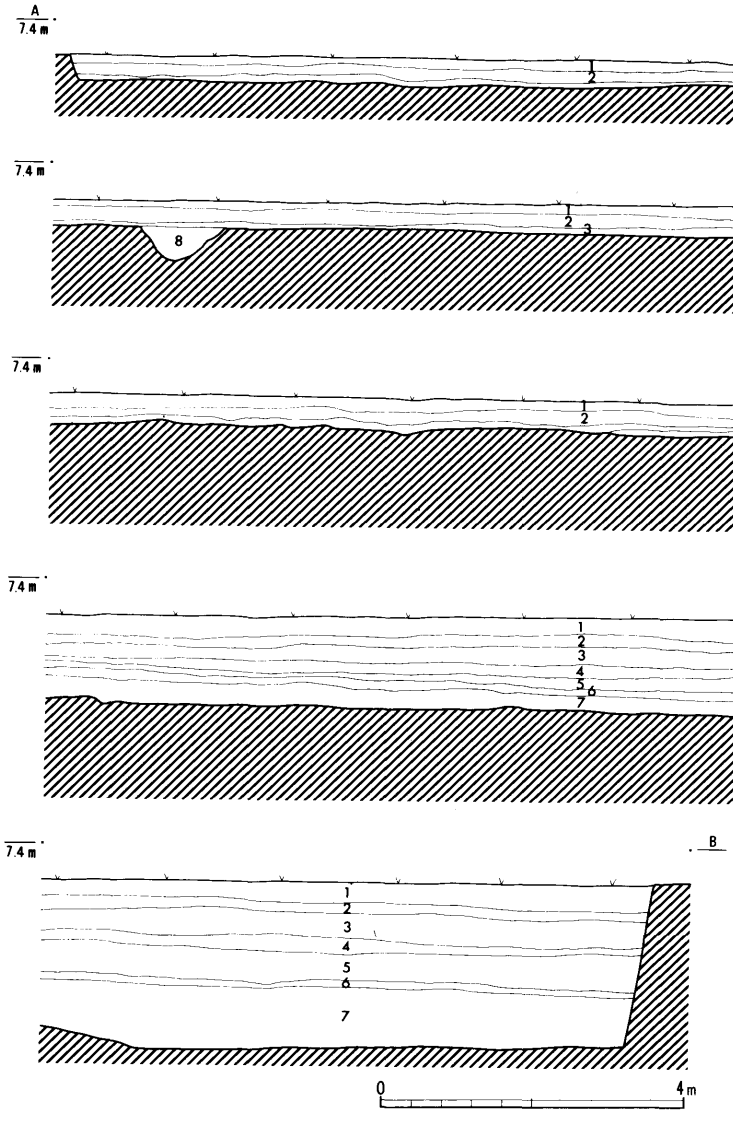
遺跡範囲の中央東側は、低湿地もしくは旧河川であったと考えられ、方形周溝墓が存在した遺構検出面は北方向へなだらかな傾斜を見せる。

方形周溝墓が存在する付近は、2層に分層可能な耕作土（下層は粘質土で床土化）の直下が、地山の黄灰色粘質土であり、遺物包含層と積極的に位置づけられる層は認められない。

北方への傾斜地においては、耕作土下に淡褐灰色粘質土、淡褐灰色シルト、褐灰色粘質土といずれも上部に3～5㎝の鉄分の沈着を持つ層が重なる。これらの層は、弥生時代から中世までの遺物を含む。次層は厚い部分で10㎝程度の鉄分の沈着層を持つ灰褐色シルト層で、植物が存在したが長期にわたり水を多く受ける状況下にあったと考えられる。無遺物層であるこの層が堆積の始まりであり、調査区の南側から続く地山は、部分的に更に下層の淡灰褐色細砂層の隆起を受けながら続いている。

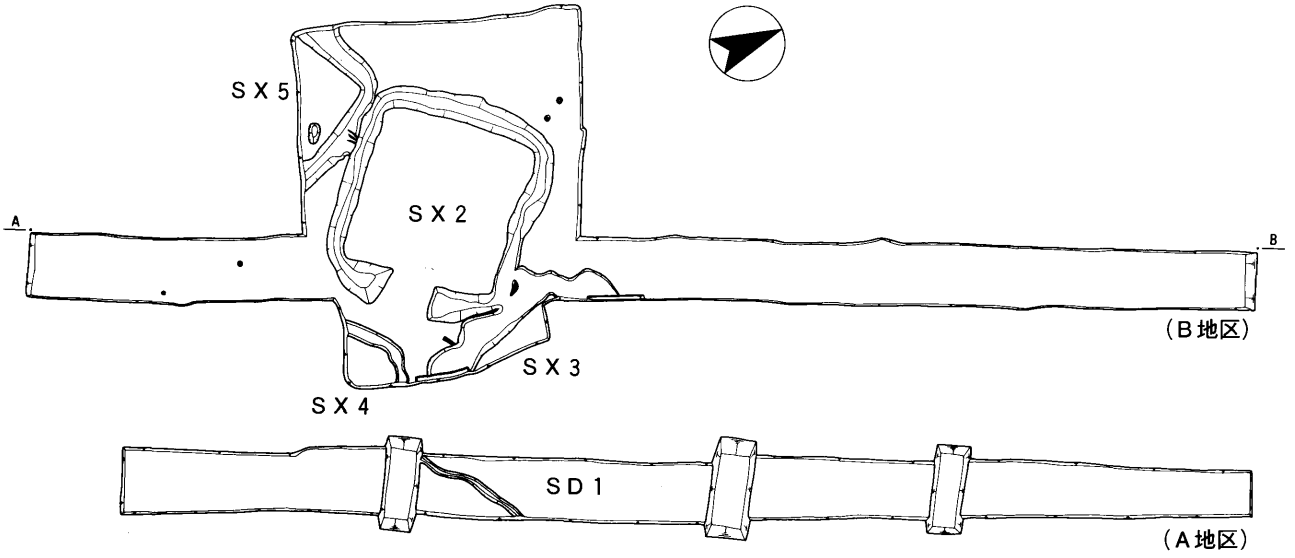


第3図　調査区位置図（1：2,000）



1 暗灰色土(耕作土)
2 暗灰色粘質土(旧耕作土)
3 淡褐灰色粘質土(上部に鉄分の沈着)
4 淡褐灰色土(上部に鉄分の沈着)
5 褐灰色土粘質土(上部に鉄分の沈着)
6 くすんだ橙色粘質土(鉄分沈着層)
7 灰褐色微砂混土(上部に鉄分の沈着)
8 暗褐灰色土

第4図　B地区（西壁）土層断面図（1：50）



第5図　遺構平面図（1：400）

3．遺　構

(1)　A地区

東西に約55m、幅3.5mの調査区である。調査区の中央西寄りで溝を1条検出した以外、遺構は認められなかった。遺物については、東側に向かって傾斜する地形に従って堆積する包含層に中世を中心とする土師器の小片が認められたのみである。

ＳＤ１　幅0.3～0.5m、深さは約0.4mで、断面形は逆台形である。遺物の出土はなかった。

(2)　B地区

南北に約55m、幅3.5mの調査区である。調査区の南側で4基の方形周溝墓を検出した。

ＳＸ２　調査区の拡張により全容が明らかとなった。形状は、一辺の中央に陸橋を持つ「中央陸橋型」のいわゆるB型墳（B_1型）[1]である。

規模は、溝の芯々間の計測で東西10.2m、南北9.1m、墳丘部の上端間についても東西7.0m、南北6.0mとやや長方形である。

溝の上端は南北の両周溝が直線的であるのに対し、東西周溝は中央が若干太くなる特徴を見せる。

溝幅は0.4～7.2m、深さは0.15～0.21mと大きいものではない。断面形は、ほぼ左右対称で法面に傾斜度の偏りはない。しかし、陸橋部の左右においては、その限りではなく、特徴的な形態を示す。陸橋部を持つ東側周溝は、北及び南周溝とのコーナーから急激にその幅を広げ、陸橋部側で最大2.3mと発達を見せる。深さについても0.35mと周溝全体において最も深い箇所となる。

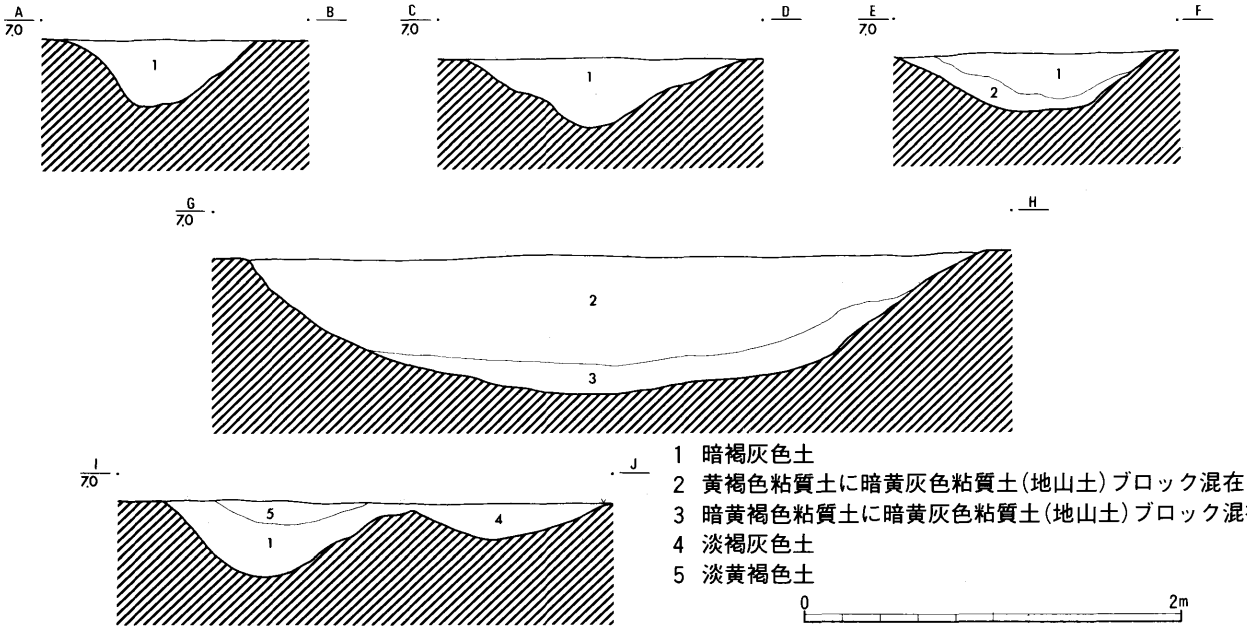
陸橋部は外側に向けて、やや「バチ型」に広がり、その内：外の比率は1：1.2である。

遺物は、陸橋部南側と北・西側周溝で出土した（第9図）。陸橋部南側の壺は、周溝底中央において直立した状態（第8図）での検出となった。「据え」られていたものと思われる。また、北側周溝の壺は破損していたが、口縁部がほぼ水平な状態で出土（第＊図）しており、直立状態で存在したのち土圧により原形を失ったものと思われる。

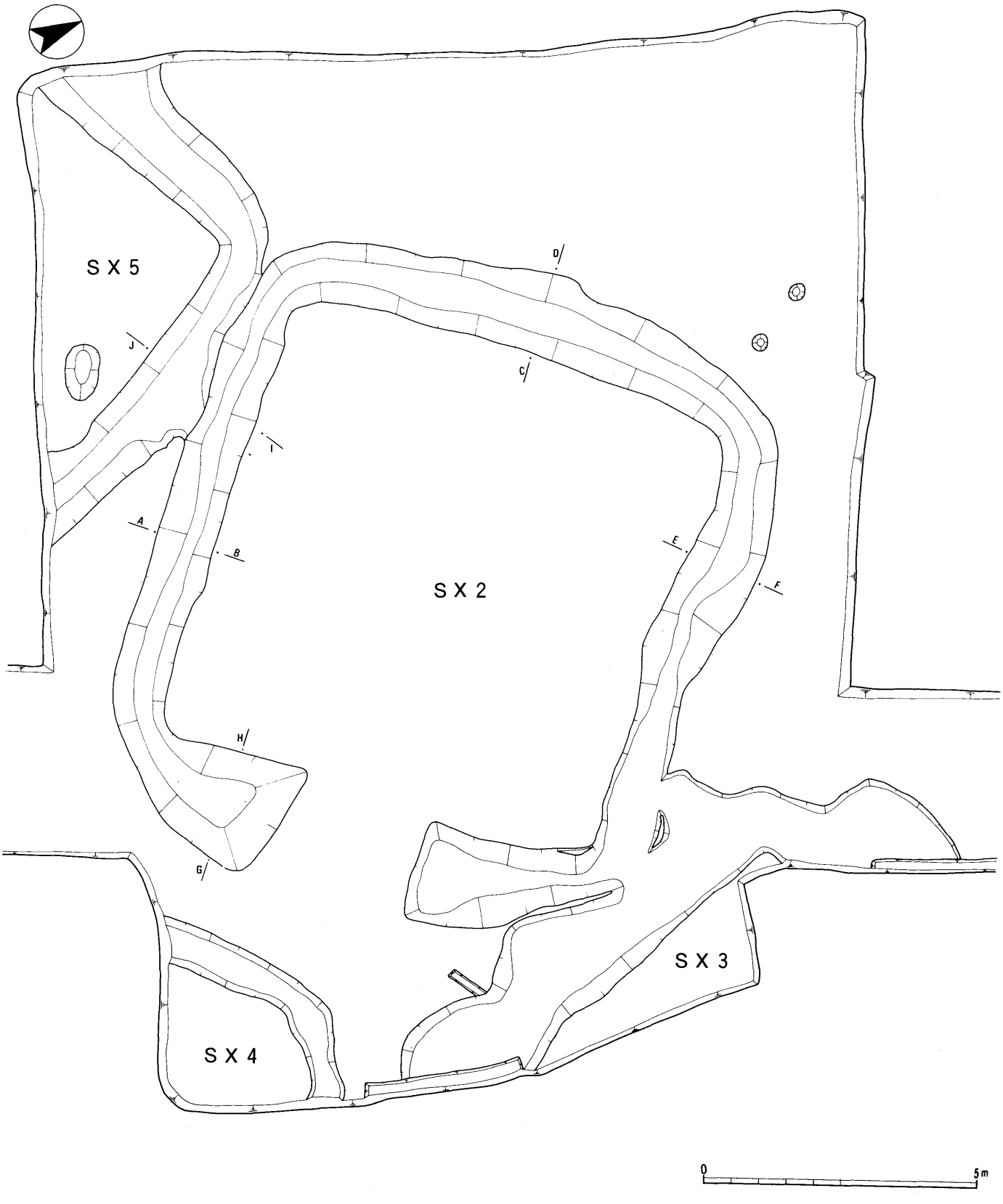
時期は出土遺物より欠山様式の古段階[2]に属すると考える。

ＳＸ３　ＳＸ２の東側に接する。大半が調査区外に存在するため全容は不明である。

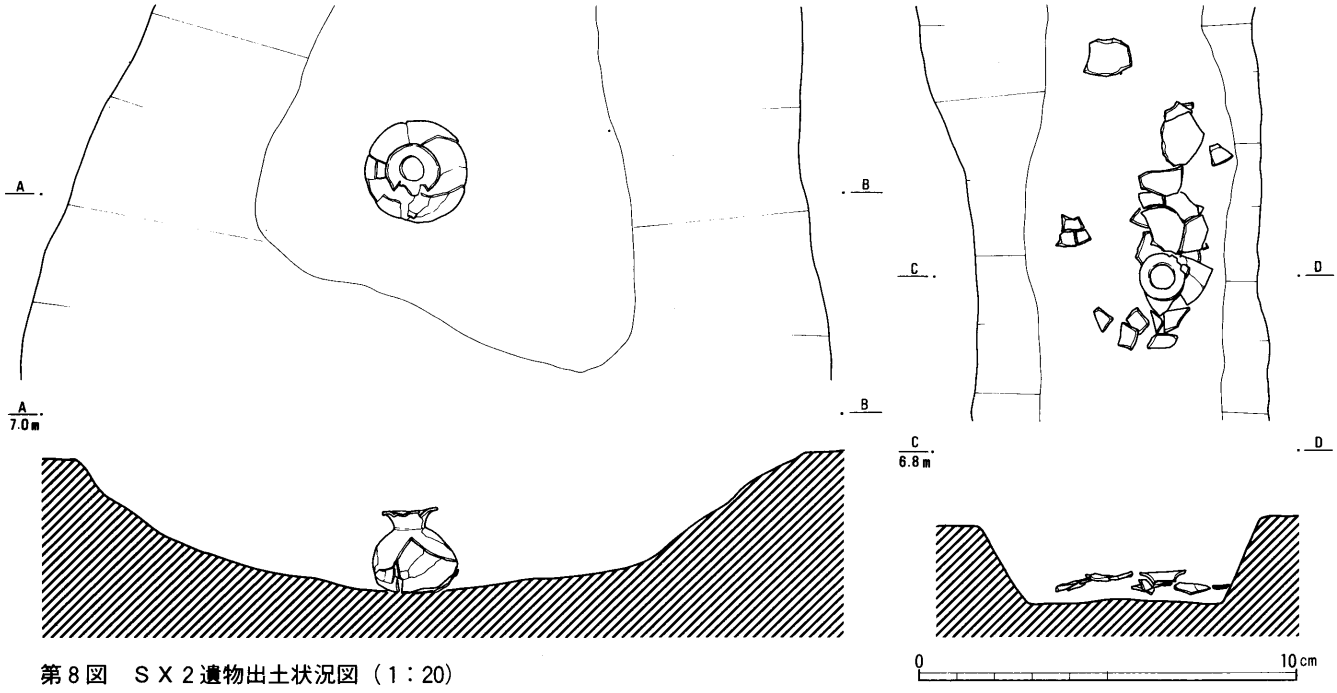
周溝はＳＸ２に比べ広いが、墳丘側が直線的であるのに対し、外側は極めて歪である。幅は１～２ｍ



第6図　ＳＸ２・５周溝土層断面図（１：40）



第７図　方形周溝墓（ＳＸ２・３・４・５）遺構平面図（１：100）



第8図　ＳＸ２遺物出土状況図（１：20）

深さは0.1m程度である。

ＳＸ２との新旧関係は、切り合い関係では把握できなかった。しかし、西側周溝から出土したヒサゴ壺の形態からＳＸ２より新しいと考える。時期は、元屋敷様式古段階[(3)]に属する。

ＳＸ４　ＳＸ２の東側に隣接する。大半が調査区外に存在するため全容は不明である。周溝は、幅0.6～0.8m、深さは0.07mで、今回調査した４基の方形周溝墓では最小規模である。遺物の出土はなく、時期も不明である。

ＳＸ５　拡張した調査区の南側において、ＳＸ２の周溝を切るかたちで構築されている。周溝の形態はＳＸ２と類似し、周溝外辺がやや孤を描くのに対し、内辺は極めて直線的である。周溝の規模は、幅0.9～1.7m、深さは0.07～0.2mである。

遺物としては、北側周溝から壺が出土している。体部の大半を欠き、出土状況からは墳丘からの転落と考えるのが妥当と思われる。時期については判然としないが、新旧関係からＳＸ２に続く、さほど時期差のない頃と考える。

4．遺　物

⑴　ＳＸ２出土遺物

３個体の遺物（１～３）が、いずれも周溝内より出土した。

壺（１・２）　やや短頸で、大きく外反する口頸部を持つ。広口壺である。口縁端部に明瞭な拡張する面を持ち、⑵には櫛歯刺突列を施す。体部の内外面はハケ目による調整が見られる。

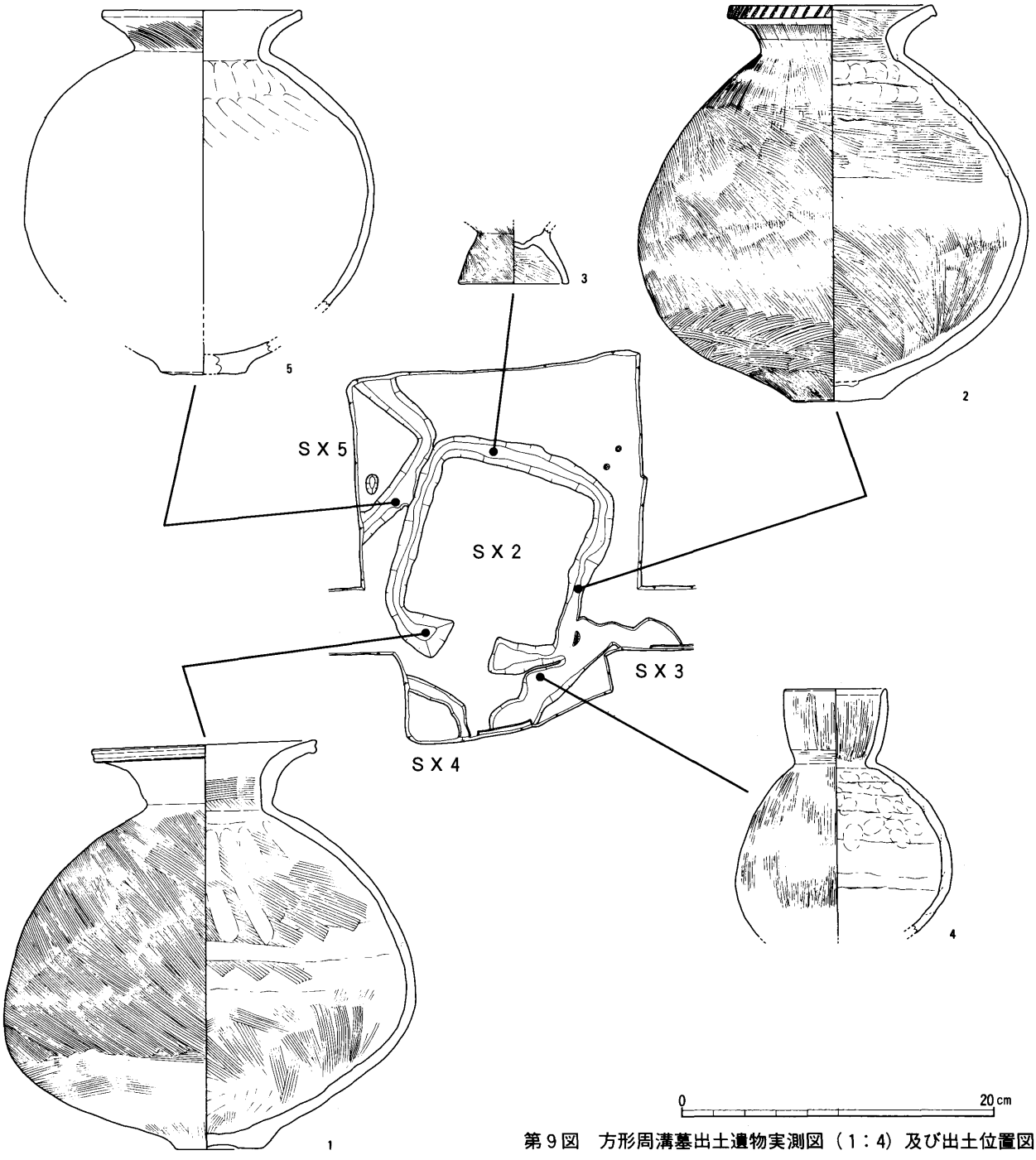
台付甕台部（３）　台部は内彎し、内外面にハケ目による調整がなされる。いわゆる「く」の字甕の台部と考えられる。

⑵　ＳＸ３出土遺物

ヒサゴ壺（４）　口頸部の広がりは小さく、明瞭ではないが内反する傾向が窺われる。外面と口頸部内面には縦方向のミガキが用いられている。

⑶　ＳＸ５出土遺物

壺（５）　大きく外反する口頸を持つ、短頸の広口壺である。口縁端部に面を持つが、あまり明瞭なものではない。頸部外面にハケ目が見られるが、体部は摩滅が著しく調整技法は判然としない。



第９図　方形周溝墓出土遺物実測図（１：４）及び出土位置図

No.	遺構	器種	法量(cm)	調整技法の特徴	色調	焼成	残存度	備考	登録番号
1	ＳＸ２	土師器 広口壺	口径　14.2 比高　25.9	体部外面に斜め方向の刷毛目調整、体部内面の刷毛目調整は粗く、頸部付近は縦方向の撫で調整が見られる。	外　7.5YR8/3(浅黄橙) 内　7.5Y3/1(オリーブ黒)	良	ほぼ完形	ＳＸ２東側周溝(陸橋南側)にて据えられた状態で出土。	001-01
2	ＳＸ２	土師器 広口壺	口径　13.0 比高　25.4	口縁端部に櫛状工具による刺突文列。頸部から肩部にかけては､縦方向の刷毛目を､体部には斜め方向の刷毛目を施す。内面には主として横方向の刷毛目調整を施す｡刷毛目は７～８本/cm	外　5YR6/8(橙) 内　7.5Y3/1(オリーブ黒)	良	ほぼ完形	ＳＸ２北側周溝出土立位状態から土圧により破損か。	002-01
3	ＳＸ２	土師器 台付甕	台部径 7.1 －	内・外面共に５本／cm刷毛目調整を施す。台部はやや内彎する。	外　10YR7/2(にぶい黄橙) 内　10YR5/1(褐灰)	良	台部のみ残存	ＳＸ２西側周溝堆積土中出土。	003-02
4	ＳＸ３	土師器 ヒサゴ壺	口径 6.5 体部径13.8 残存高15.8	外面は、縦方向のやや粗い磨き調整を施し、頸部のみ横方向の磨きが認められる。内面は口・頸部のみ縦方向のやや粗い磨き調整を施し、体部は撫で調整を施すが、粘土接合痕が目立つ。	外　7.5YR8/3(浅黄橙) 内　5YR7/3(にぶい橙)	良	底部を完全に欠く	ＳＸ３西側周溝底部出土。転落遺物か	003-01
5	ＳＸ４	土師器 広口壺	口径　12.4 比高　23.3	外面は、摩滅が著しく調整は不明瞭。但し頸部には７本／cmの刷毛目調整が施されている。内面は撫で調整	外　7.5YR5/3(にぶい褐) 内　5YR5/3(にぶい赤褐)	良	口縁部と底部の⅔を欠く	ＳＸ４東側東側周溝底部出土。転落遺物か	003-03

第１表　瀬干遺跡出土遺物観察表

5．結　話

瀬干遺跡は、櫛田川やその支流の氾濫[4]による浸食を免れた微高地上に立地していた。調査区の北側は低湿地（旧河道の可能性もある）、西側は大雷寺川という環境にある。方形周溝墓群の存在は、この微高地の北側縁辺部にあたる地域が当該時期における墓域となっていたことを示し、南側に広がる集落跡の存在を推定させる。

方形周溝墓は、欠山様式の古段階から元屋敷様式の古段階に並行関係[5]を持つものと考えられる。特にＳＸ２は溝一辺の中央に陸橋を持つ、いわゆる「B_1型墳」[6]の範疇で捉えられるものであるが、陸橋部が「バチ」状に開く点を加味するならば、続く「B_2型墳」への発展の嚆矢を担っていると言えよう。

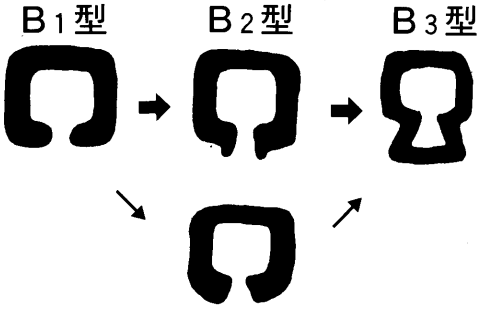
伊勢湾西岸域の「B_1型墳」は、北伊勢地域の宮山遺跡[7]（大安町）をはじめ、南伊勢地域の下之庄東方遺跡[8]（嬉野町）、草山遺跡[9]（松阪市）、上ノ垣内遺跡[10]（多気町）、寺垣内遺跡[11]（明和町）などで多数存在し、方形周溝墓の一形態として広く分布[12]している。しかし、陸橋部側の周溝上端が直線的に延び、より陸橋部の存在を意識している例は、瀬干遺跡をはじめ、上ノ垣内遺跡で認められる程度である。

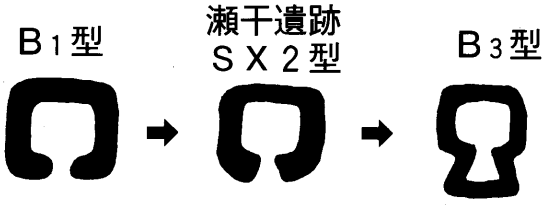
これは「B_1型墳」の範疇で捉えるものである点については歪めないが、「B_2型墳」への発展を担う形態として考える必要があろう。伊勢湾西岸域において、草山遺跡ＳＸ114・ＳＸ115に代表される「B_1型墳」は、陸橋部を形成する溝が丸くおさめている例がほとんどであり、瀬干遺跡等で見られる直線的なものは存在しない。

ところで、現在伊勢湾西岸域における「B_2型墳」の存在は未だ知られていない。したがって瀬干・上ノ垣内遺跡の例は、南伊勢地域における墳丘形態の発展過程を支えるものとして位置付けることができよう。これは「B_1型墳」から「B_2型墳」への発展過程において、瀬干遺跡の例が中間的な位置を占めるという考えに基づくものである。

ただし同地域には、「B_3型墳」の可能性がある大足遺跡[13]（松阪市）１号墳が存在する一方で、「B_2型墳」の事例報告は無い。事例が寡少で明言はできないが、試案として、南伊勢地方における方形周溝墓の形態変遷を「B_1型墳」→「瀬干遺跡ＳＸ２」型→「B_3型墳」と位置付けておく。

（宇河雅之）





南伊勢地方の形態変遷の可能性

第10図　方形周溝墓形態変遷模式図

〈注〉

(1) 赤塚次郎「東海のＢ型墳」（『シンポジウム　西相模の三・四世紀方形周溝墓をめぐって』東海大学校地内遺跡調査団　1992年）。

(2) 大参義一「弥生式土器から土師器までー東海地方西部の場合ー」（『名古屋大学文学部研究紀要』XLVII、1968年）。
宮腰健司「尾張における欠山式土器とその前後」（『欠山式土器とその前後』研究・報告編、第３回東海埋蔵文化財研究、1986年）。
山田猛「山城遺跡」（『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

(3) 前掲(2)。

(4) 本報告の「Ⅰ．位置と環境」を参照。

(5) 前掲(2)。

(6) 前掲(1)。

(7) 宮山遺跡現地説明会資料（『東海環状自動車道発掘調査ニュース』No.６　三重県埋蔵文化財センター　1995年）。

(8) 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ　下之庄東方遺跡』（三重県教育委員会　1988年）。

(9) 『草山遺跡発掘調査月報』No.4（松阪市教育委員会、1983年）。

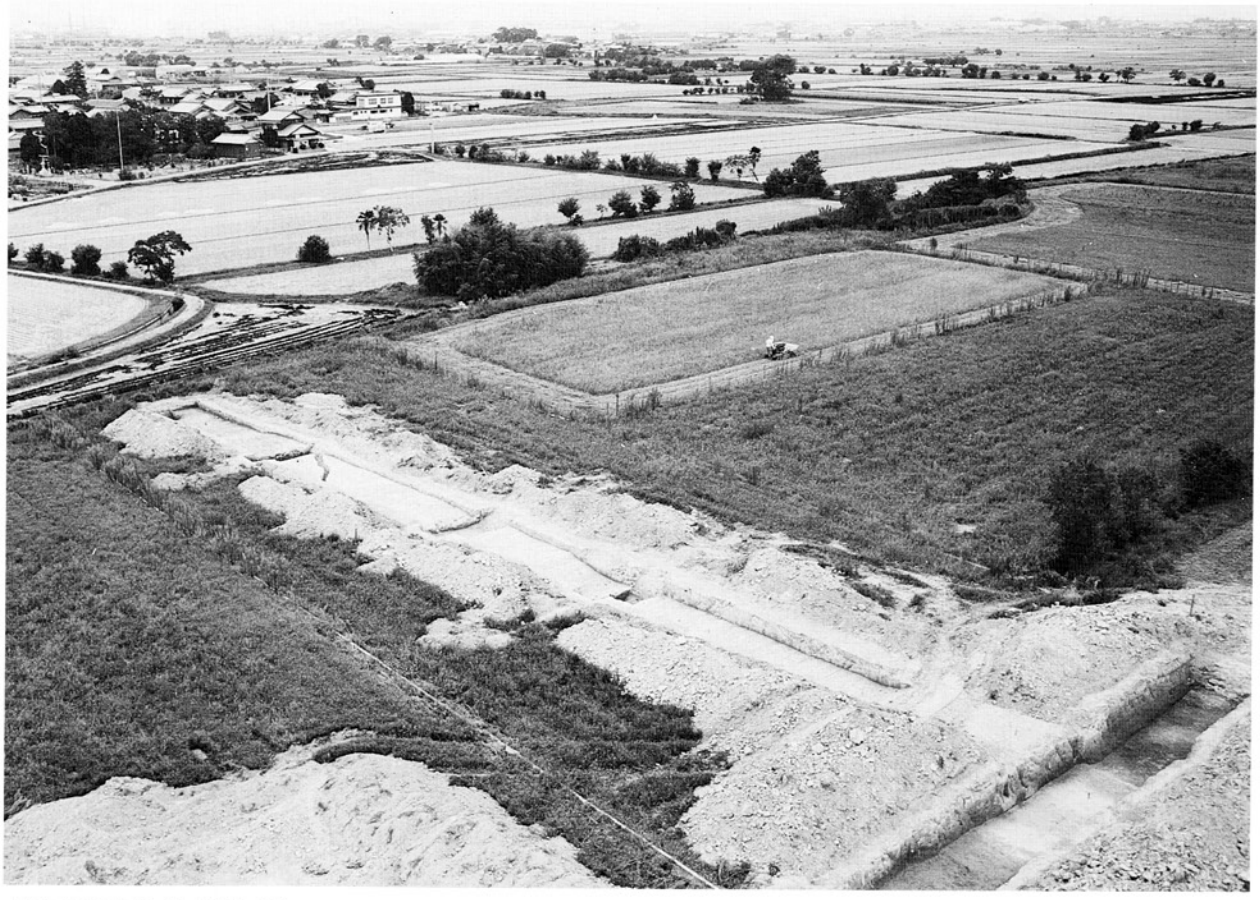
(10) 西村修久「上ノ垣内遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告』Ⅱ　三重県埋蔵文化財センター　1996年）。

(11) 中野敦夫「寺垣内遺跡発掘調査概要」（『第６回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料　1985年）。

(12) 赤塚次郎「東海系のトレース　－３・４世紀の伊勢湾沿岸地域ー」（『古代文化』Vol.44　古代學協會　1992年）。

(13) 小林秀「大足遺跡」（『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1990年）。

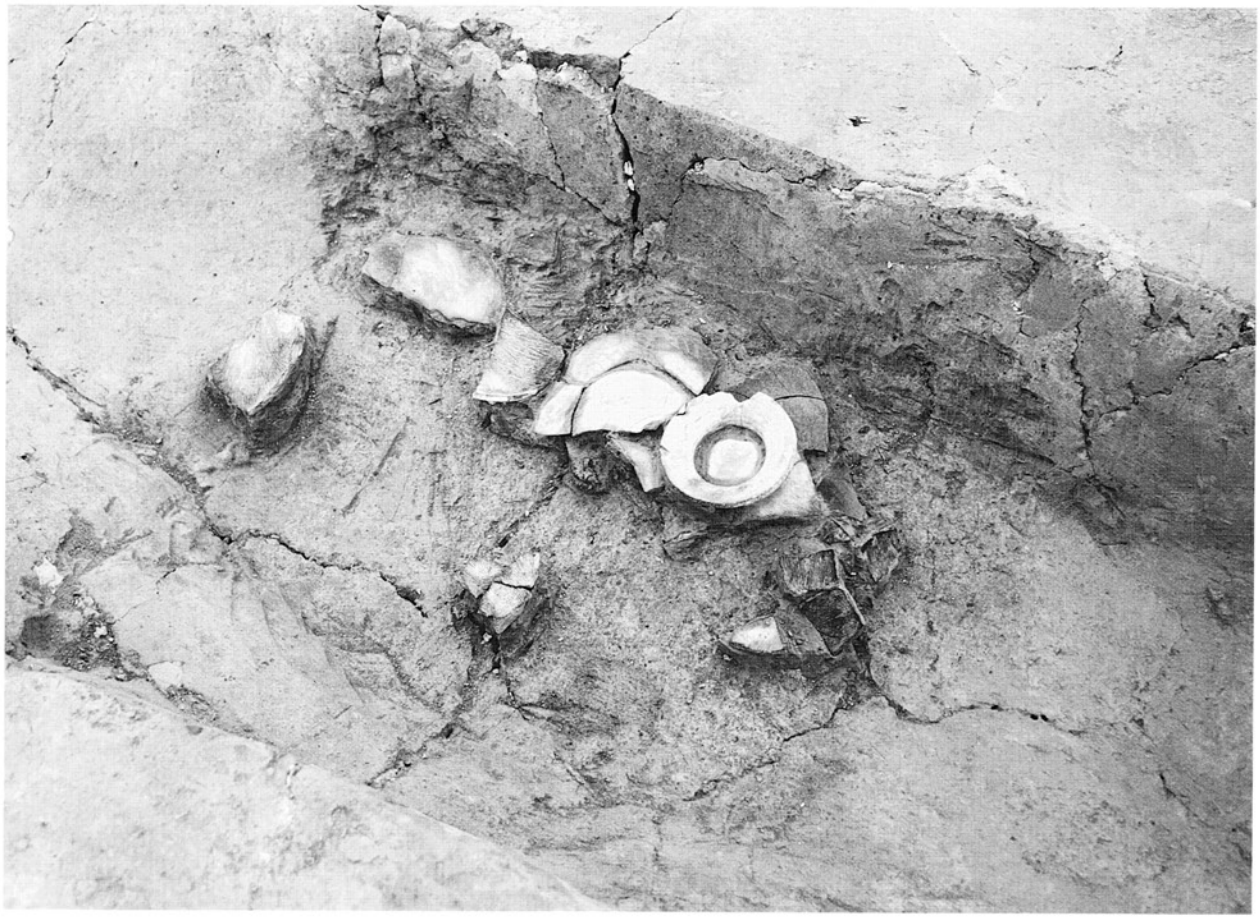
B地区から神山を望む（北から）



A地区調査区全景（東から）

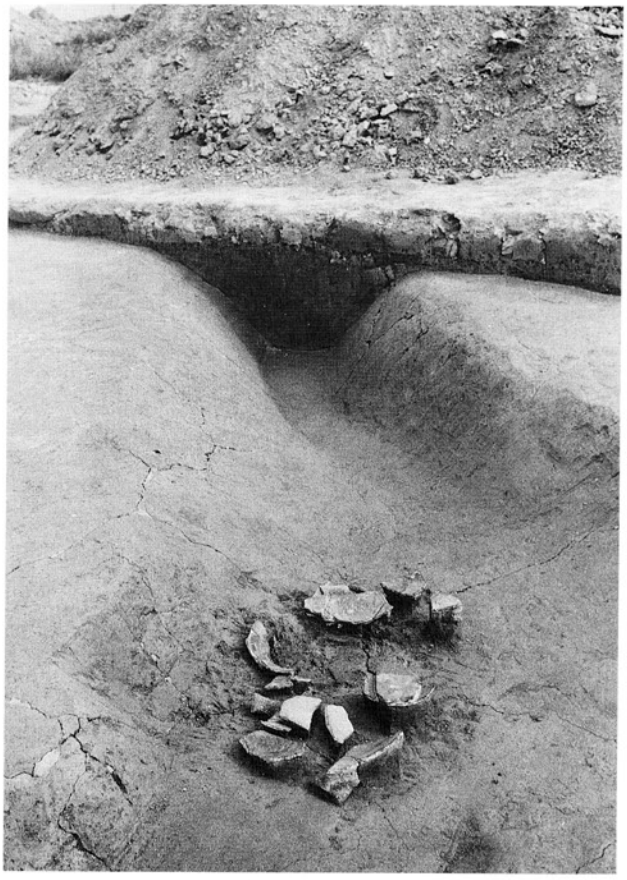
方形周溝墓群全景（東上空から）

ＳＸ２　陸橋部南側周溝　壺出土状況（東から）

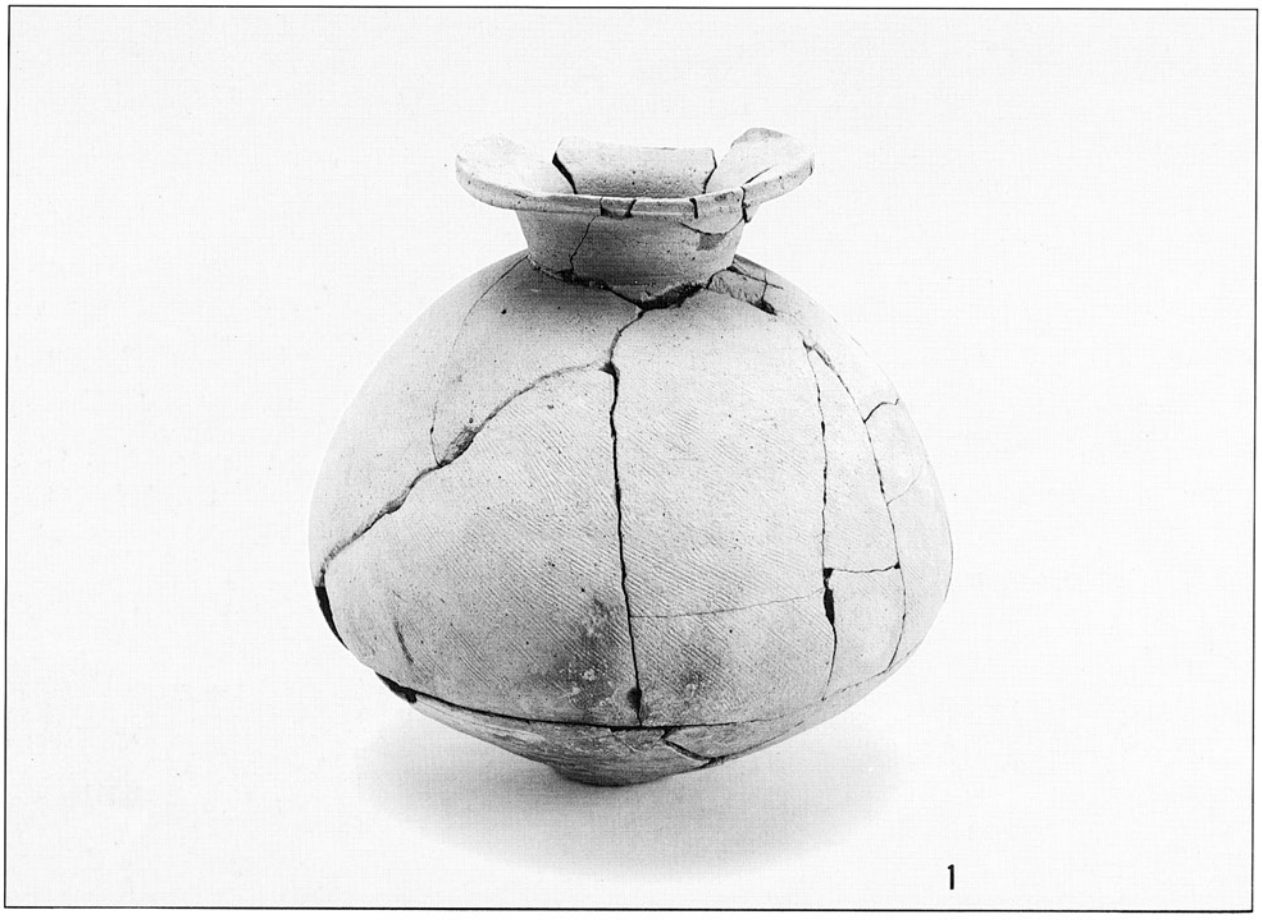


ＳＸ２北側周溝遺物出土状況（北から）

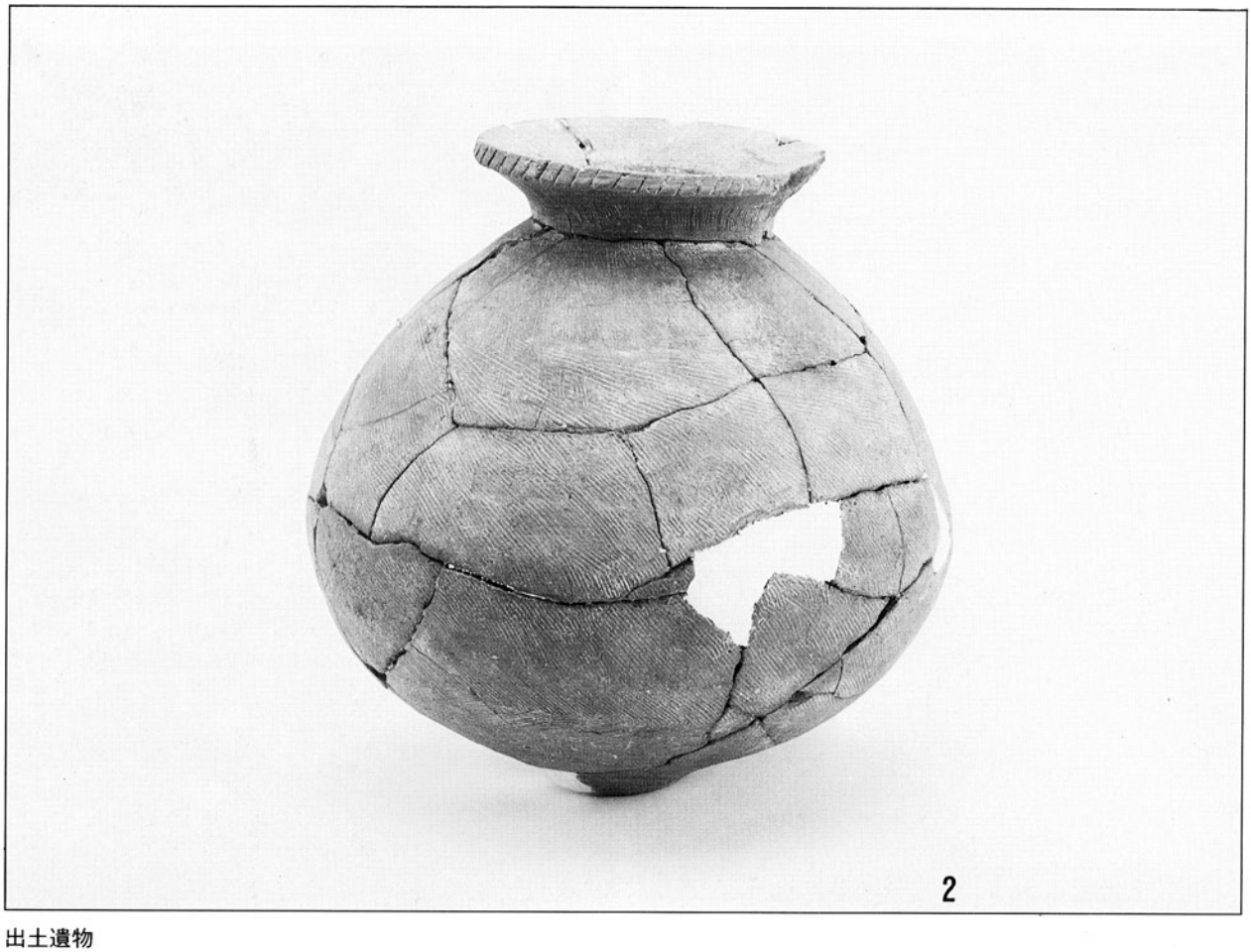
ＳＸ２北側周溝遺物出土状況（東から）



ＳＸ５北側周溝遺物出土状況（北から）



1



2

出土遺物

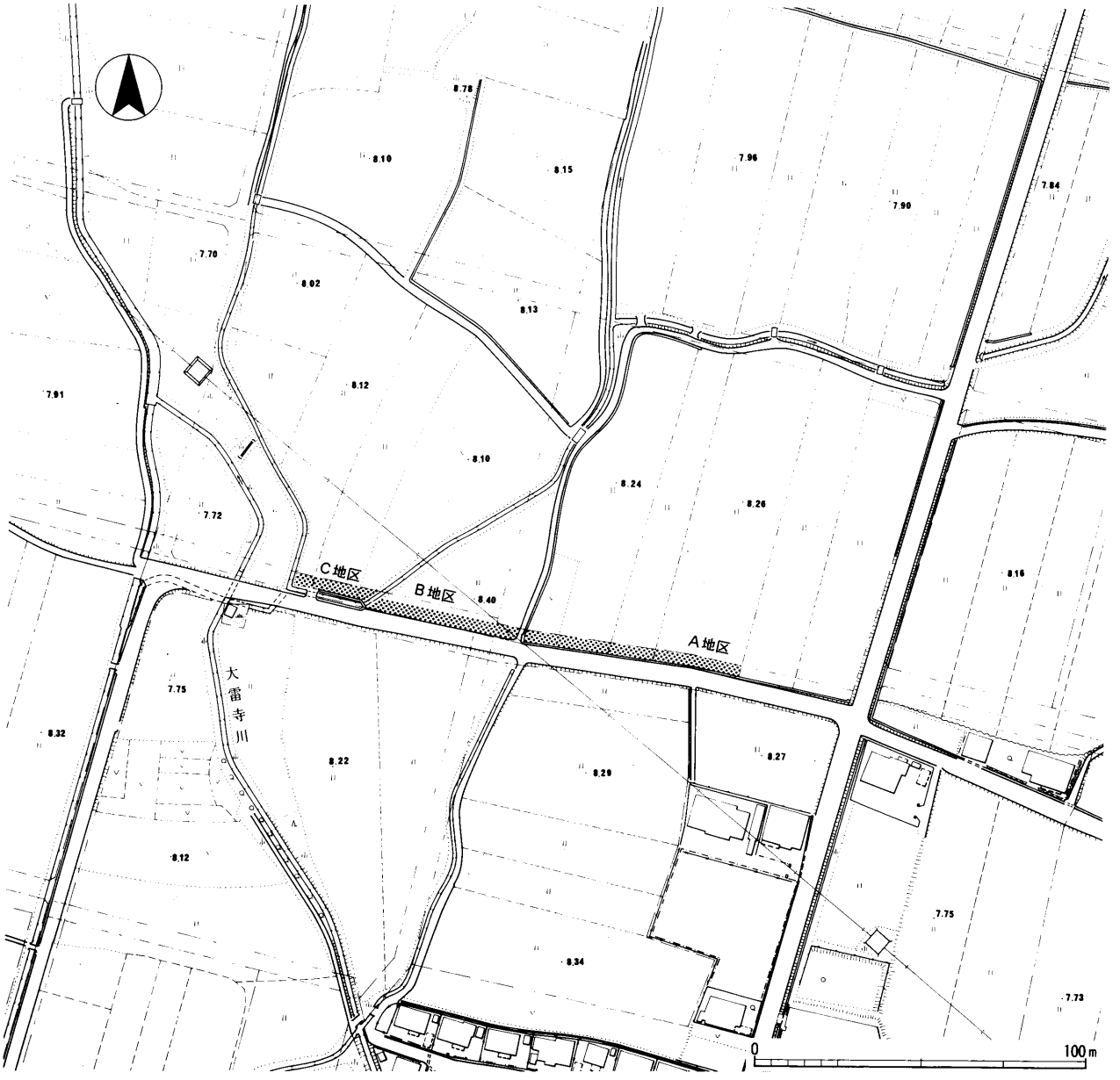
Ⅲ. 綾垣内（あやがいと）遺跡

1．はじめに

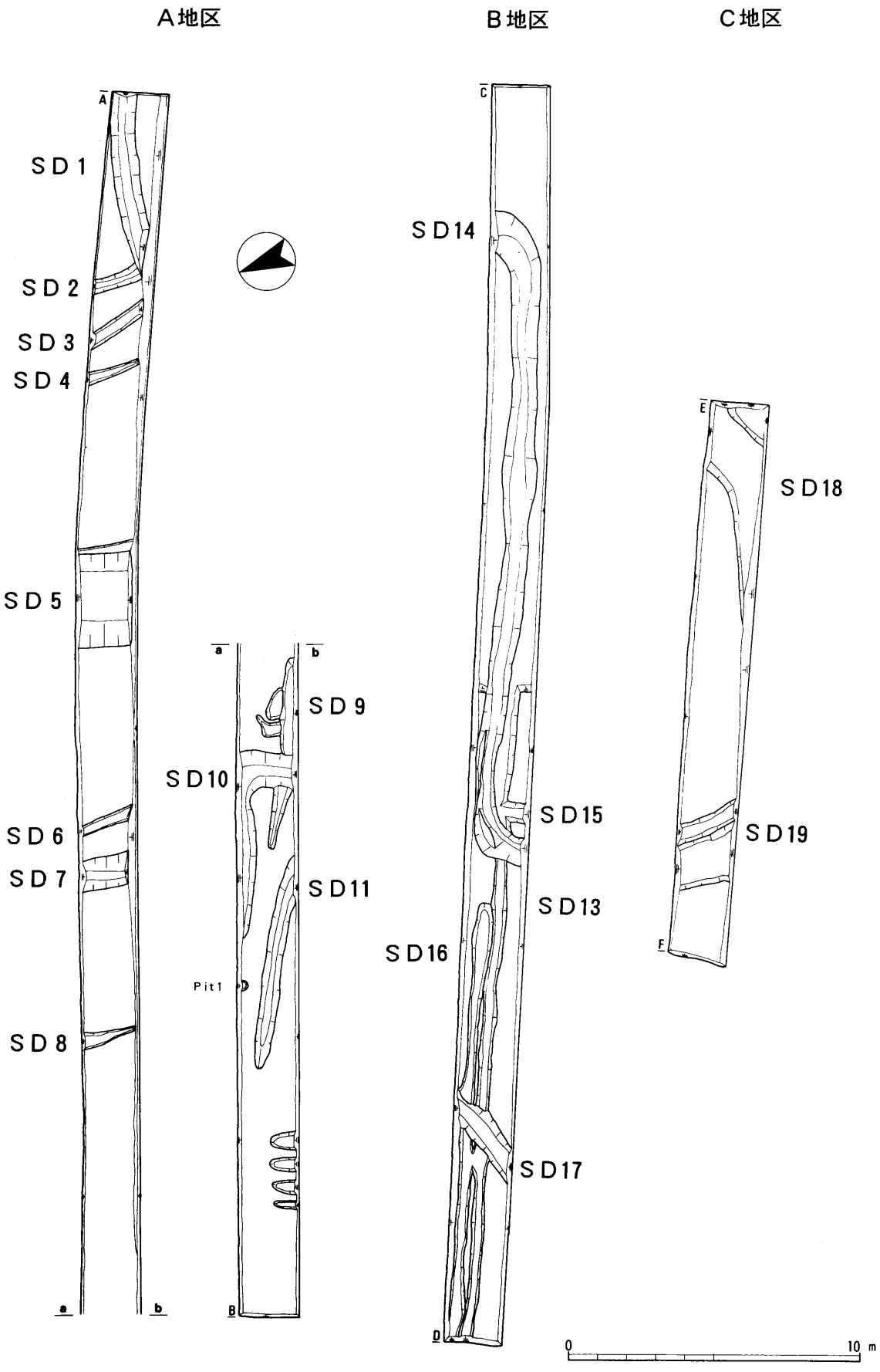
綾垣内遺跡は、松阪市櫛田町字綾垣内・極原（しわすはら）・柳辻に所在する。近鉄櫛田駅北方の広大な田園地帯の一角、標高8.m前後の低地に立地し、現状は水田および一部畑である。南には道路一本隔てて、柳辻遺跡が接している。また大雷寺川を間に挟んだ南西方向に、大蓮寺遺跡がある。

今回、ほ場整備事業に伴い、保存困難な用水路部分のみの発掘調査を行なうこととなった。遺跡範囲17,000㎡のうち、300㎡が対象である。調査期間は平成7年9月13日より同月25日までであった。

幅2m×延長130mの細長い調査区は、横切る2本の水路によって3地区に分断されている。調査にあたり、これらを東から順に「A地区」「B地区」「C地区」と呼称することにした。

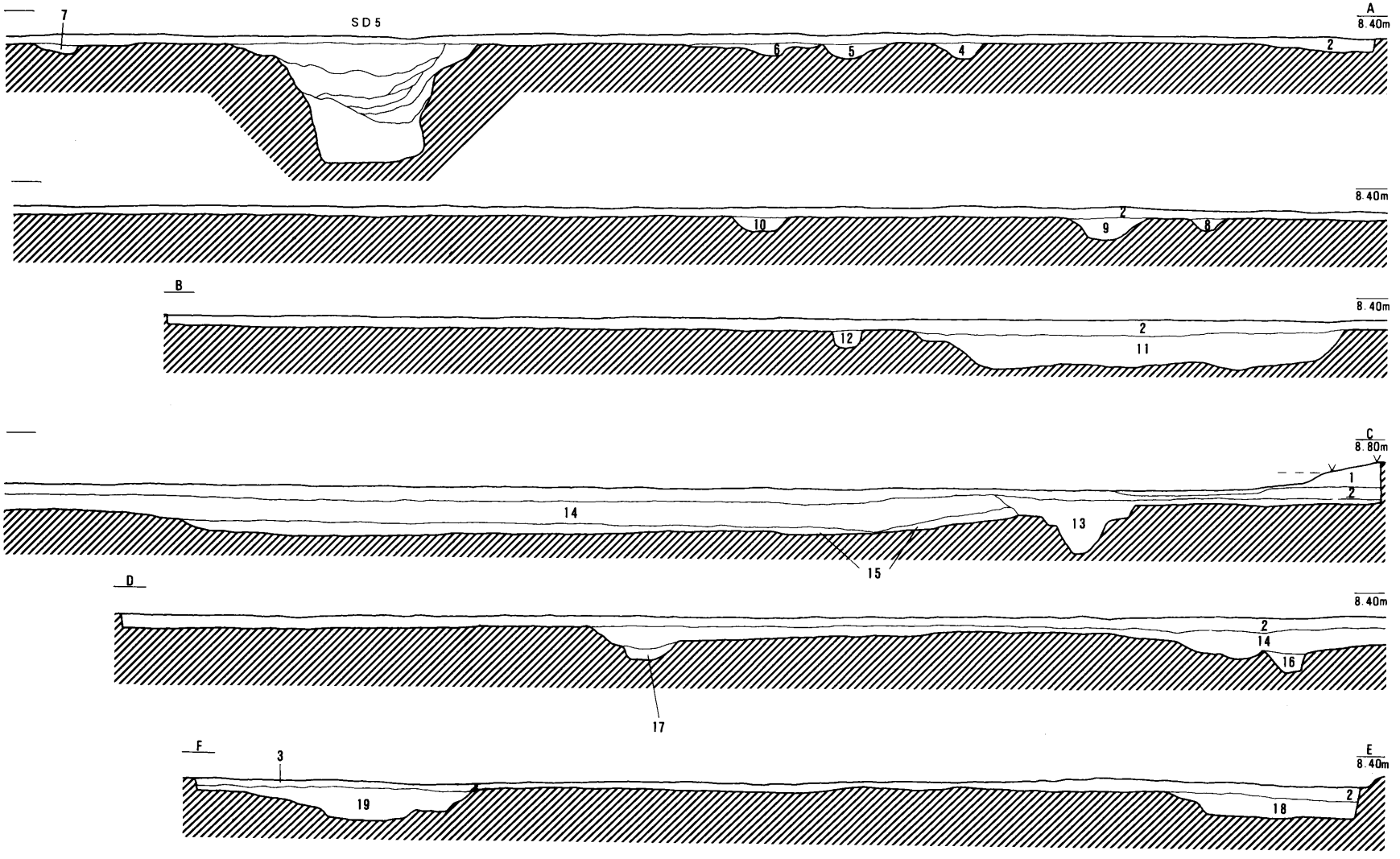


第11図　調査区位置図（1：2,000）



第12図　遺構平面図（1：200）

第13図　調査区北壁土層断面図（1：100）



1　黒灰色細砂混土（耕作土）
2　淡灰褐色粘質土（床　土）
3　灰褐色粘質土　（　〃　）
4　暗灰褐色粘質土（ＳＤ２埋土）
5　灰色砂（地山土ブロック若干混）（ＳＤ３埋土）
6　暗灰色砂（地山土ブロック若干混）（ＳＤ４埋土）
7　暗褐灰色砂（ＳＤ12埋土）
8　淡灰褐色シルト（ＳＤ６埋土）
9　淡灰黄色シルト（ＳＤ７埋土）
10　淡灰黄色シルト（ＳＤ８埋土）
11　灰色粘質土（ＳＤ10埋土）
12　灰色粘質土（Ｐｉｔ１埋土）
13　淡灰色粘質土（ＳＤ14埋土）
14　暗灰色粘質土
15　暗褐灰色粘質土（地山土ブロック混）
16　灰色粘質土（ＳＤ15埋土）
17　灰色粘質土（ＳＤ17埋土）
18　灰色粘質土（ＳＤ18埋土）
19　灰色砂質土（ＳＤ19埋土）
（※ＳＤ５埋土は第14図参照）

0　5m

2．層　　序

調査区は水田・畑の南端に位置している。南側に接する道路と田畑との間にはコンクリート製の側溝が埋設されているため、層序の観察は調査区北壁において行なった。

遺構検出面までの基本的層序は、第１層；黒灰色細砂混土（耕作土）、第２層；淡灰褐色粘質土（床土）、第３層；黄褐色シルト（地山）で、地山にはマンガン斑紋が入る。またＢ地区・Ｃ地区においては、第２層下部に厚さ約４㎝の鉄分沈着層が認められた。床土直下に検出面があり、表土からの深さは30～40㎝ほどである。

3．遺　　構

Ａ・Ｂ・Ｃの３地区合わせて、溝19条などを検出した。以下、地区別に時代を追って述べていくことにする。なお、遺構の深さは全て検出面からの数値である。

(1)　Ａ地区

長さ65ｍの調査区であり、字極原地内にある。この地区では、平安時代から鎌倉時代初頭にかけての溝が12条検出されている。

①平安時代前期の遺構

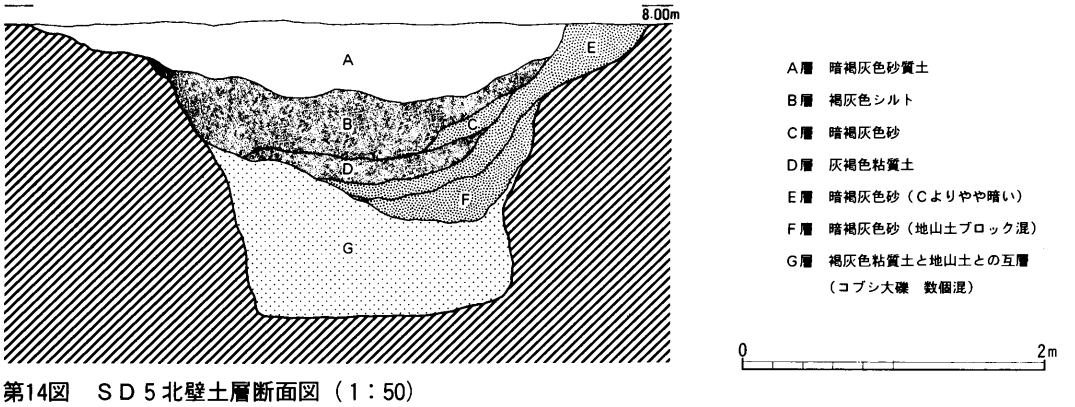
ＳＤ３　調査区東端部を斜めに横切る幅1.15ｍ、深さ0.22ｍの溝である。方向はＮ25°Ｗで、南より北の方がやや低くなっている。東側斜面のなだらかさに比して、西側は急である。土師器甕１点のみ出土している。

②平安時代後期～末期の遺構

ＳＤ２　ＳＤ３の東隣で検出された。幅0.85ｍ、深さ0.27～0.29ｍである。方向はＮ10°Ｗで、南から北へ向かって微妙に傾斜しつつ調査区を横切る。ＳＤ１に切られている。山茶椀が１点出土した。

ＳＤ５（第14図）　今回検出された溝の中で最大のものである。地区東部、道路に沿ってやや折れ曲がる地点において、Ｎ12°Ｅ方向で調査区とほぼ直交する。深さ1.95ｍ。検出面での幅は4.2ｍと非常に広い。断面を見ると、上部では緩やかな傾斜で徐々に幅を狭めていくが、40～50㎝下がったあたりからは、ほとんど垂直に落ち込む。底での幅は1.75ｍ。遺物が多く含まれていたのはＢ・Ｄ・Ｅの３層で、より下層にはあまりなかった。山茶椀が多数出土したほか、土師器甕やロクロ土師器椀などもあった。これらの遺物によって、平安後期から末期まで存続した溝と考えられる。なお奈良時代の平瓦・軒平瓦も出土しているが、混入であろう。

ＳＤ６　地区中央やや東寄りに位置する幅0.7ｍ、深さ0.2ｍの小規模な溝であり、Ｎ10°Ｗの方向をとる。底の絶対高は南北ともほぼ同じである。灰釉陶器椀



第14図　ＳＤ５北壁土層断面図（１：50）

などが出土した。

ＳＤ10　地区西部で調査区を横断したのち、北壁寸前で西へ90°折れる。単なる直角コーナーなのか、あるいは三叉路・四叉路なのかは、調査区外のため不明である。幅1.5ｍ、深さは南0.46ｍに対し、北0.6ｍと、他の溝に比べて傾斜が強い。屈曲部とさらに西へ伸びる部分とはほぼ同高である。方向はＮ15°Ｅを示し、南壁際でＳＤ９に切られる。出土遺物にロクロ土師器小皿などがある。

③鎌倉時代初頭の遺構

ＳＤ１　調査区東端で緩やかなカーブを描く東西溝である。Ｅ０°～10°Ｓ、幅1.0ｍ、深さは0.33～0.35ｍで、西から東へ向かっての微傾斜となる。ＳＤ２を切る。船底状の断面で、埋土は２層に分かれる。上層は灰色砂（やや北側に偏る）、下層は灰褐色粘質土である。山茶椀や常滑産の陶器甕片などが出土している。

④鎌倉時代以降の遺構

ＳＤ９　地区西部でＳＤ10を切る東西溝である。西端は調査区内で完結している。Ｅ20°Ｓ、幅0.6ｍ以上、深さ西0.14ｍ～東0.2ｍで、埋土は灰色シルトの単層である。遺物の出土はなかった。

⑤時期不明の遺構

いずれも遺物が出土せず、時期判定のできない遺構である。

ＳＤ４　調査区東部の南北溝である。２段目の幅は0.85ｍ、上段は両肩へ緩やかに広がり2.35ｍを測る。深さ0.2ｍ、レベルは南から北への傾斜を示している。溝方向Ｎ10°ＷがＳＤ２・６と揃うので、これらと同時期の可能性もある。

ＳＤ７　ＳＤ６の西隣に位置するＮ10°Ｅの南北溝である。幅1.4ｍ、深さ0.35ｍ。南から北へ傾斜している。

ＳＤ８　地区中央部の南北溝である。方向Ｎ５°Ｗ、幅0.95ｍ、深さ0.25ｍで、南から北へ傾斜する。

ＳＤ11　地区西部の東西溝である。南壁から現れ、角度Ｅ20°Ｓで西へ6.5ｍ伸びて終わる。幅0.6ｍ、深さ0.2ｍ、東側が若干低い。船底状の断面で、埋土は灰色粘質土の単層である。

ＳＤ12　ＳＤ５とＳＤ６の間に位置する南北溝である。幅0.8ｍ、深さ0.15ｍと浅く、底のみ検出された。Ｎ10°Ｅ方向と思われる。

⑵　Ｂ地区

長さ44ｍ、字柳辻地内にある。この地区では奈良時代後半～平安時代初期の溝１条と、それ以前の溝４条が検出された。これらはＳＤ16→17→13→14の順で掘られたと考えられる（ＳＤ15は不明）。

①奈良時代以前の遺構

いずれも遺物は出ていないが、切合関係により時期を判断した。

ＳＤ13　地区西半でＳＤ16と並行して東西に伸びる。幅0.4～0.5ｍ、深さ西0.31ｍ～東0.37ｍ、Ｅ15°Ｓ方向の溝で、船底状断面を有す。ＳＤ14よりやや褐色がかった淡灰色粘質土が埋土である。ＳＤ16・17を切り、ＳＤ14に切られる。ＳＤ15との切合は不明である。なお、ＳＤ14内面南側斜面の一部に痕跡が残存していた。

ＳＤ15　地区の中央付近を南北に走る、幅0.75ｍ、深さ0.4ｍの溝である。南から北に向けて低くなっており、方向はＮ15°Ｅを示す。ＳＤ14に切られている。ＳＤ13とは切合不明である。

ＳＤ16　地区西端から中央部方面に伸びる東西溝である。幅0.3～0.6ｍ、深さ0.51～0.62ｍ、Ｅ15°Ｓ方向を向く。傾斜方向は一定していない。断面は船底状を呈し、淡褐灰色粘質土によって埋没していた。ＳＤ17・13に切られている。東西両端はともに並行するＳＤ13の下に潜り込み、重複するようなかたちに見える。

ＳＤ17　地区西部の溝である。ＳＤ16を切ったのち、ＳＤ13に切られている。幅0.95ｍ、深さ0.2ｍで、南から北へ傾斜する。Ｎ60°Ｅ方向に走るが、これはすぐ西の、Ｂ地区・Ｃ地区を画する畦畔と並行関係になる。

②奈良時代後半～平安時代初期の遺構

ＳＤ14　地区中央部から東部にかけて存在する大きな溝で、ＳＤ13・15を切る。調査区とほぼ並行して東西に約21ｍ走り、東端では北に、西端では南に、それぞれ90°屈曲する。東西方向はＥ15°Ｓである。内面は、中段にテラスを持つ階段状の掘削になっていて、検出面での幅2.0ｍ、テラス面では1.1ｍである。深さは0.8～1.1ｍを測る。他の溝とは逆に、北

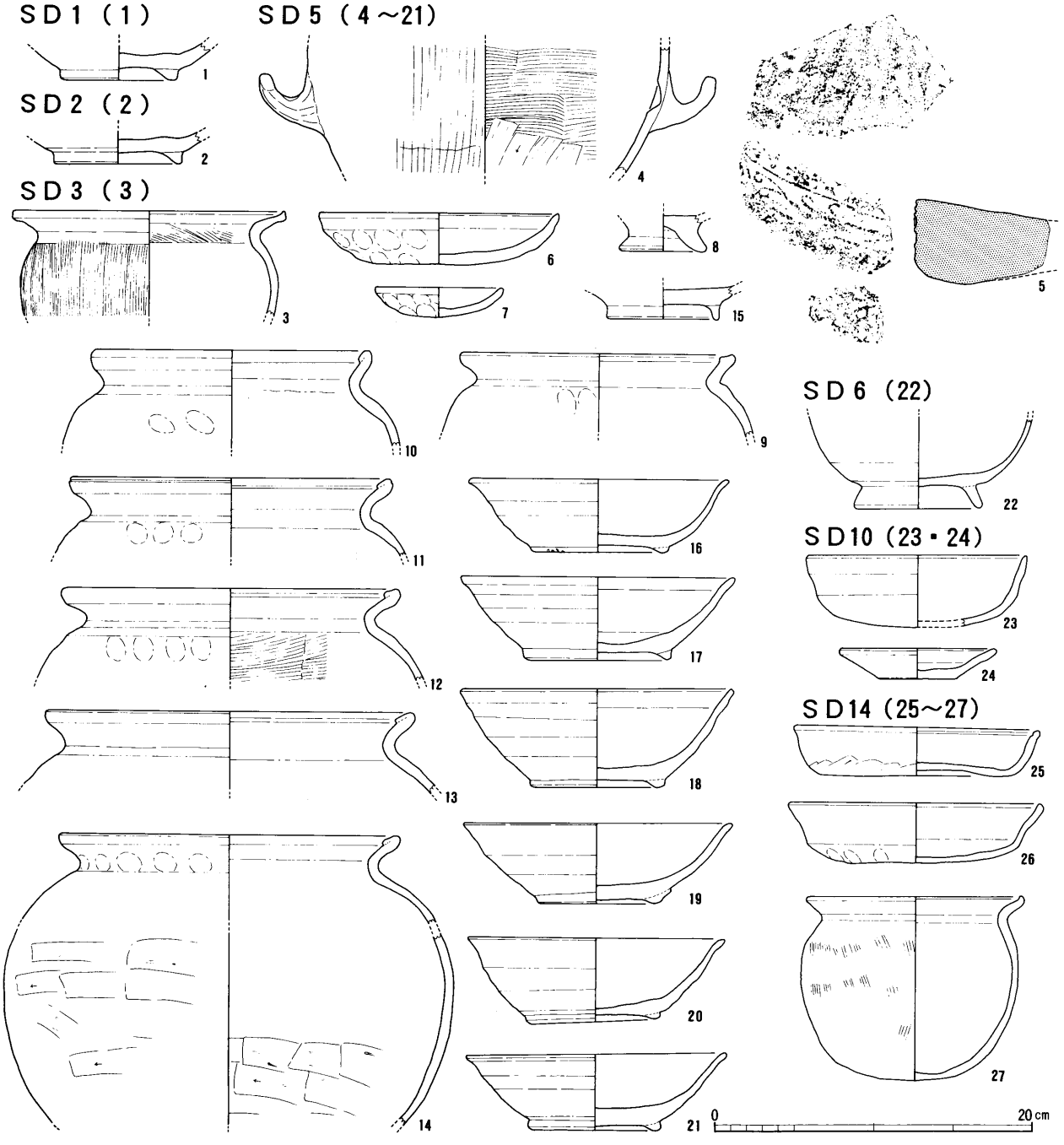
が高く南が低い。同様に西が低く東が高い。調査区南壁で断面観察を行なったところ、溝の底から高さ21cmのところまで暗褐灰色土の堆積が見られた。この溝は北から南へ水の流れがあったと考えられる。出土遺物は土師器杯２点（うち１点完形）・甕１点などである。

⑶ C地区

長さ19ｍの調査区である。字綾垣内地内にある。ここでの遺構は、時期不明の溝２条のみである。

ＳＤ18　地区東端にあり、その全貌は現れていない。幅２ｍ以上、深さ0.25ｍ、最東端はさらに一段深く0.55ｍである。南から北へわずかに傾斜し、方向はＮ50°Ｅを示す。遺物は出土しなかった。

ＳＤ19　調査区西端にあるＮ０°Ｅ（真北）方向の溝である。幅0.47ｍ以上、深さ0.6ｍ。第２層から切り込んでいる。そのため床土が他の場所と少し違い、下部の鉄分沈着も薄い。すなわち、非常に新しい埋土である。遺物は、流れ込みと思われる須恵器の小片が一片あったのみである。



第15図　出土遺物実測図（１：４）

4．遺　物

出土遺物は整理箱にして約6箱分であった。中心は平安時代の土器で、前後の時期のものも若干ある。すべて溝から出土した。詳細は遺物観察表に譲るとして、ここでは表に記載されていないことを中心に、時期別[1]に述べていく。

⑴　奈良時代以前の遺物

ともにＳＤ5上部からの出土遺物であり、混入と考えられる。

土師器鍋（4）　貼付け把手部分のみ出土した。時期は古墳時代後期～奈良時代であろう。

扁行唐草文軒平瓦（5）　藤原宮式(6641系)[2]に属する。天花寺廃寺出土のH21B[3]に類似するが、やや後出的である。上外区に配された珠文は、4個が現存し、さらにあと4個分の痕跡が確認できる。磨滅の著しい下外区にも、かすかに線鋸歯文が見える。顎の形態は不明だが、H21Bには段顎・直線顎の2例があり、それより後出と考えられることから、おそらく直線顎であろう。奈良時代の瓦と推定される。

⑵　奈良時代後半～平安時代初期の遺物

23はＳＤ10、25～27はＳＤ14から出土した。

土師器杯(23・25・26)　25は形態的には奈良中期の特徴を有するが、調整は後期的である。完形で出土した。23・26は平安初期のものと考えられる。

土師器甕(27)　最大径部が体部上方にあり、平安初期の特徴を示す。

⑶　平安時代前期の遺物

土師器甕（3）　9世紀前半(平安前Ⅰ期)のものと考えられる。ＳＤ3から出土した。

⑷　平安時代後期～末期の遺物

この時期の遺物が最も多く、なおかつ2・22・24以外はＳＤ5からの出土である。

土師器杯（6）・**小皿**（7）　末期の遺物である。

土師器台付皿（8）　高台のみの出土であった。

土師器甕（9～14）　6個体のうち、12のみ内面にハケメが施されている。

ロクロ土師器小皿(24)・**椀**(15)　24はＳＤ10出土である。15は灰釉椀の形態を模倣したと考えられる。ともに平安後Ⅱ期に属する。

灰釉陶器椀(22)　猿投窯編年[4]の東山72号窯式に相当する形態だが、胎土がやや悪く、百代寺窯式まで下るものと判断した。ＳＤ6からの出土である。

山茶椀（2・16～21）　すべて第4型式(尾張型[5])に属する。16は体部と底部の境目あたりに、焼きひずみによるひび割れが生じている。2のみＳＤ2出土である。

⑸　鎌倉時代初頭の遺物

山茶椀（1）　底部のみがＳＤ1から出土した。第5型式(渥美型)である。

5．結　語

⑴　溝について

今回の調査では、奈良時代から鎌倉時代初頭に至る溝が19条検出された。中心時期は平安時代後期～末期と考えられる。以下、若干の考察を行なう。

旧飯野郡の条里地割の方向、N15°E[6]に乗る溝は5条（ＳＤ10・13・14・15・16)あった。ＳＤ10・14は、それぞれ平安後期と奈良後半～平安初期の溝であり、条里プランが存在する時期[7]のものと言える。それに対し、他の3条はＳＤ14より古く、まだプランがなかったころの溝かも知れない。しかしどの溝も、現在見られる畦畔には合致しない。埋没条里の可能性も考えるべきか。いずれにしてもプランと地割の先後関係は現在のところ不明であり、これらの溝と条里制との関連もまた、はっきりしない。

また調査区周辺の地形は、南から北へ、西から東への緩傾斜となっている。12条はこれと同じ傾きを示した。残りは方向のはっきりしない6条と、全く逆方向のＳＤ14である。なぜＳＤ14だけが、逆に流れるように掘り込まれているのか。この溝の東西長は約21ｍであり、1尺＝約30㎝とすると70尺になる。条里方向に乗ることや、鉤の手に曲がる形状などを考え合わせると、何かの区画溝であった可能性も出

第２表　綾垣内遺跡出土遺物観察表

No.	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
1	ＳＤ１	陶器　山茶椀	底径 7.5	平らな底部に低い角形高台を貼り付ける。	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ	灰白色	微砂粒を少し含む	良	１／12	高台接地面に砂痕ヵ	004-02
2	ＳＤ２	〃　〃	底径 8.1	〃	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ	〃	細砂粒を少し含む	〃	底部 １／２		001-07
3	ＳＤ３	土師器　甕	口径17.0	体部から大きく外反する口縁部で、端部はつまみ上げる。	体部外面ハケ 内面ハケメのちナデ　口縁部横ナデ	淡黄色	細粒砂を少し含む	〃	１／10	ハケメ７本／１cm （外面タテ・内面ナナメ）	001-05
4	ＳＤ５	〃　鍋	体部径22.0	丸みをおびた体部に把手を貼り付ける。	把手貼り付けナデ 体部外面荒いハケメ 体部内面ハケメのちヘラミガキ 体部内面把手部分裏側指オサエ	(内)灰白色 (外)灰黄褐色	細粒砂を少し含む	〃	把手部のみ	ハケメ 外面３本／１cm(タテ) 内面４本／１cm(ヨコ)	005-03
5	〃	軒平瓦	高 4.9	直線顎ヵ	平瓦部凹面タテナデ 瓦頭部ヘラケズリ 顎面格子タタキ(斜め)	青灰色	石粒を含む	〃	瓦頭部 １／３	布目痕15本／１cm 下部剝離はげしい	007-01
6	〃	土師器　杯Ａ	口径15.0 器高 3.3	底部から丸みをおびて立ち上がる口縁部をもつ。	底部外面未調整 口縁部横ナデ 内面ナデ	灰白色	微砂粒を多く含む	〃	３／５		004-03
7	〃	〃　小皿	口径 8.0 器高 1.9	〃	底部外面オサエ 他はナデ	淡黄橙色	細砂粒を少し含む	〃	３／５	内面にスス付着	004-01
8	〃	〃　台付皿	底径 5.5	断面が三角形の高台を貼り付ける。	高台貼り付けのち横ナデ 底部外面ヘラケズリ	橙色	微砂粒を少し含む	〃	底部 ほぼ完存		001-04
9	〃	〃　甕	口径17.0	大きく外反して折り返す口縁部をもつ。	口縁部横ナデ 他はナデ	灰褐色	微砂粒を含むやや粗	〃	口縁部 ほぼ完存	体部外面磨滅のため調整不明 口縁部外面スス付着	003-01
10	〃	〃　〃	口径17.5	〃	口縁部横ナデ 体部外面指オサエ未調整 〃内面ナデ	灰白色	細砂粒を少し含む	〃 〃	口縁部 １／４	外面スス付着 内面口縁部～体部、粘土接合痕あり	005-02
11	〃	〃　〃	口径20.0	〃	口縁部横ナデ　沈線 体部外面指オサエ未調整 〃内面ナデ	にぶい黄橙色	細砂粒を多く含む	〃	口縁部 １／４	内面多量、外面少量スス付着	005-01
12	〃	〃　〃	口径21.0	〃	口縁部横ナデ 体部外面オサエ 〃内面ハケメ(ヨコ)	浅黄色	細砂粒を少し含む	〃	口縁部 １／10	ハケメ５本／１cm	004-04
13	〃	〃　〃	口径23.0	〃	口縁部横ナデ 他はナデ	浅黄橙色	微砂粒を少し含む	〃	口縁部 １／４	口縁部外面スス少量付着	002-01
14	〃	〃　〃	口径21.0 体部最大径28.0	〃	口縁部横ナデ＋オサエ 体部内外面上部ナデ 〃下部ヘラケズリ	にぶい黄橙色	微砂粒を少し含む	〃	口縁部 １／２	器壁剝離し調整不明瞭 体部外面上部・内面下部スス多く付着	002-②-01
15	〃	ロクロ土師器　椀	底径 7.0	平らな底部に高台を貼り付ける。	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ	浅黄橙色	微砂粒を含む	〃	底部 １／２		001-02
16	〃	陶器　山茶椀	口径16.3 底径 8.4 器高 4.6	平らな底部に低い角形高台を貼り付ける。	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ	〃	微砂粒を含む	〃	口縁部 １／２ 底部完存	底部内面重ね焼き痕 (φ8.7cm)	006-01
17	〃	〃　〃	口径17.1 底径 9.2 器高 5.2	〃	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ	〃	細砂粒を少し含む	〃	底部 １／２	自然釉かかる 内面スス少量付着	004-05
18	〃	〃　〃	口径17.2 底径 8.5～6 器高 6.2	〃	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ(右回転)	〃	細砂粒を多く含む	〃	口縁部 ５／６	底部内面重ね焼き痕 (φ8.5cm) 高台接地面に砂痕ヵ	002-02
19	〃	〃　〃	口径16.8 底径 7.7 器高 5.1	〃	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ	〃	細砂粒を含む	〃	２／３	自然釉かかる	003-04
20	〃	〃　〃	口径16.0 底径 8.4 器高 5.3	〃	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ(右回転)	〃	小石・砂粒を含む	〃	口縁部 一部欠損	自然釉かかる 墨のようなもの付着、転用硯ヵ	003-03
21	〃	〃　〃	口径16.3 底径 4.8 器高 8.3	〃	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ	〃	小石・砂粒を含む	〃	〃	自然釉かかる	003-02
22	ＳＤ６	灰釉陶器　椀	底径 8.1	平らな底部に高台を貼り付ける。	底部外面糸切り痕未調整 高台横ナデ 他はロクロナデ	灰白色	石粒を含むやや粗	〃	底部完存	釉薬漬け掛け	006-02
23	ＳＤ10	土師器　杯Ａ	口径14.0	底部から丸みを帯びて立ち上がる口縁部をもつ。	口縁部横ナデ 底部外面未調整 内面ナデ	灰黄褐色～にぶい橙色	微砂粒を多く含む	〃	１／２	内面スス少量付着 ｅ手法	001-03
24	〃	ロクロ土師器　小皿	口径10.0 底径 1.9 器高 5.0	平らな底部より外方に開く口縁部。	底部外面糸切り痕未調整 他はロクロナデ	(内)褐灰色 (外)にぶい黄橙色	微砂粒を少し含む	〃	口縁部 １／３ 底部完存		001-06
25	ＳＤ14	土師器　杯Ａ	口径15.3 底径11.8 器高2.8～3.1	平らな底部から丸みを帯びて立ち上がる口縁部で、端部は若干外反する。	口縁部横ナデ 底部内面ナデ 〃外面ヘラケズリ	黄橙色	微砂粒を少し含む	〃	完形	底部内面に直線暗文(螺旋暗文の痕跡もあり) ｂ手法	006-03
26	〃	〃　〃	口径16.0 器高 3.8	平らな底部から丸みを帯びて立ち上がったのち外反する口縁部で、端部は内傾する。	口縁部横ナデ 底部外面指オサエ未調整 内面ナデ	橙色	微砂粒を少し含む	〃	２／５	ｅ手法	001-01
27	〃	〃　甕	口径13.8 器高11.6	体部から「く」の字に屈曲して外方へ開く口縁部で、端部はつまみ上げる。	体部外面ハケメ 底部外面ナデ 他は横ナデ	(外)褐灰色 (内)淡黄色	微砂粒を少し含む	〃	口縁部 ３／５ 底部完存	スス付着 外面磨滅はげしい ハケメ４本／１cm	006-04

てくる。

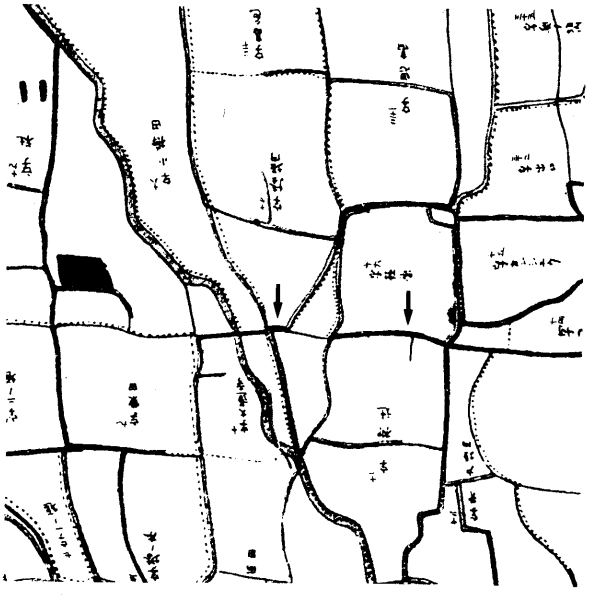
一方、調査区の南に接する道路は、現在ほぼ直線道になっているが、以前はもっと曲がりくねっていたようである。その様子は、戦後間もない頃の航空写真（写真図版１）や明治時代の地籍図（第16図）によって見ることができる。調査区東端の辺りは、道路が現在よりも北寄りに湾曲していた部分である。それとよく似たカーブを持つＳＤ１は、かつての側溝なのではなかろうか。溝のラインを東へ延長すると、農道を越えたところで道がなくなり、かわりに小さな溝川が流れている（第11図）。

なおＣ地区周辺は、最近５～10年の間に水路の改修工事が行なわれており、Ｕ字溝が埋め込まれたり、水路を移動させたりしている。前掲の写真図版１および第16図を見ると、ＳＤ18・19は改修前の旧水路・旧畦畔の痕跡と考えられる。これらの溝が埋まったのは非常に新しい時期（昭和末期～平成初頭）であるが、掘られたのは少なくとも明治19年以前である。いつまで遡るかは不明であるが、かつての畦畔との関わりを考えたい。

⑵ 遺物について

ＳＤ５から多数出土した山茶椀の中には、焼きひずみによりひび割れたものが混じっていた。このような欠陥商品が消費地で発見されるのは、珍しいことである。

同じくＳＤ５出土の扁行唐草文軒平瓦は、藤原宮式であった。伊勢国において、藤原宮式はまず天花寺廃寺に伝えられ、そこから一志郡下に広がり、さらに南勢方面へと波及していった[8]。当遺跡の周辺では、伊勢寺廃寺[9]、御麻生薗廃寺[10]、貴田寺廃寺、大雷寺廃寺に類例が見られる。瓦出土地点の南西方向には大雷寺川が流れており、かつてその水中には多くの瓦片が埋没していたという[11]。また付近の水田からも出土しており、その辺りの字「大蓮寺」を、地元の人は「ダイライジ」と呼んでいる。大雷寺廃寺の推定地は600ｍほど東南の現櫛田神社裏であるが、



第16図　「伊勢国飯野郡櫛田村全図」〔部分・明治19年〕
（『松阪市史』別巻１松阪地図集成，松阪市史編さん委員会1983年より転載）

再検討も必要か。

⑶ まとめ

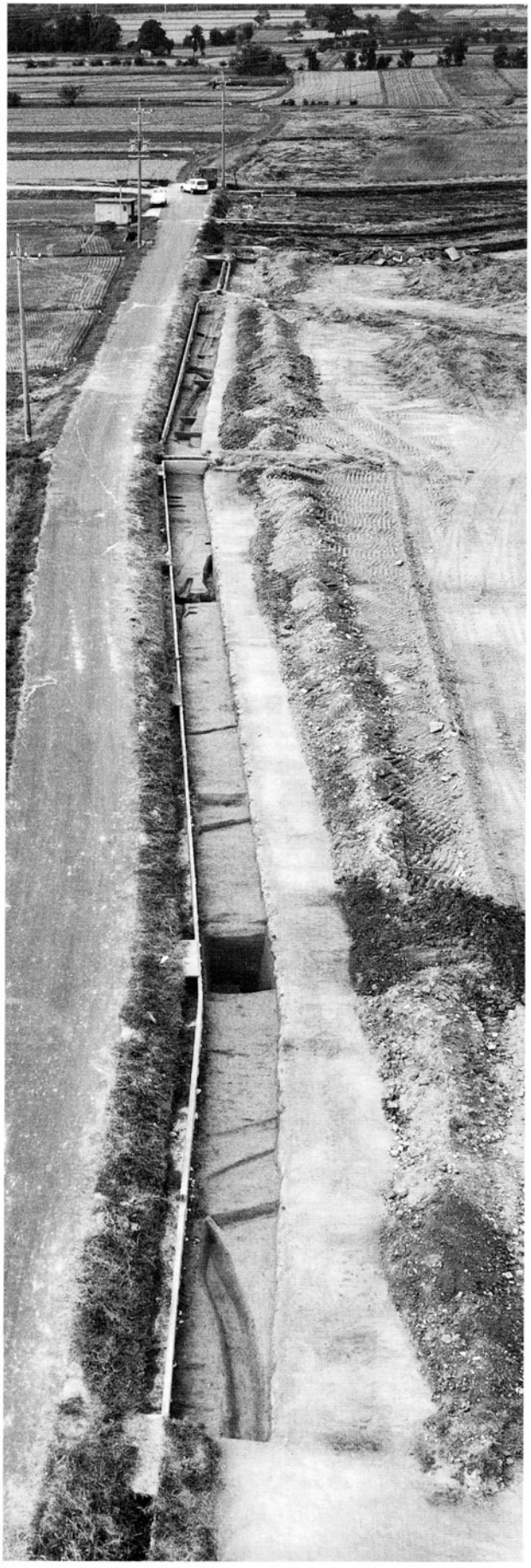
調査範囲が狭く、まとまった結論を導き出すことは困難であったが、いくつかの可能性を考えることはできた。

条里制がいつから施行されるのかは依然不明であるが、現在見られる畦畔と同じＮ15°Ｅ方向の溝が、奈良・平安期にも存在したことは確認された。しかも奈良時代には、ＳＤ14によって区画された地区もあったようである。また調査区南の道路には側溝があった可能性もあるが、鎌倉初頭には埋まってしまい、水田の一部になったと考えられる。そのほかＳＤ５では、山茶椀を包含する層のさらに上層から、奈良時代以前の瓦片や土師器鍋の把手が出土している。永保２年（1082）や保安２年（1121）の大洪水[12]に代表される、櫛田川の氾濫によるものと推測されよう。

綾垣内遺跡の大部分は水田下に眠っており、ほんのわずかの情報での考察ではあった。しかし、遺跡の性格の一端が垣間見えたと思われ、今後のさらなる調査・研究が期待される。　（袖岡直樹）

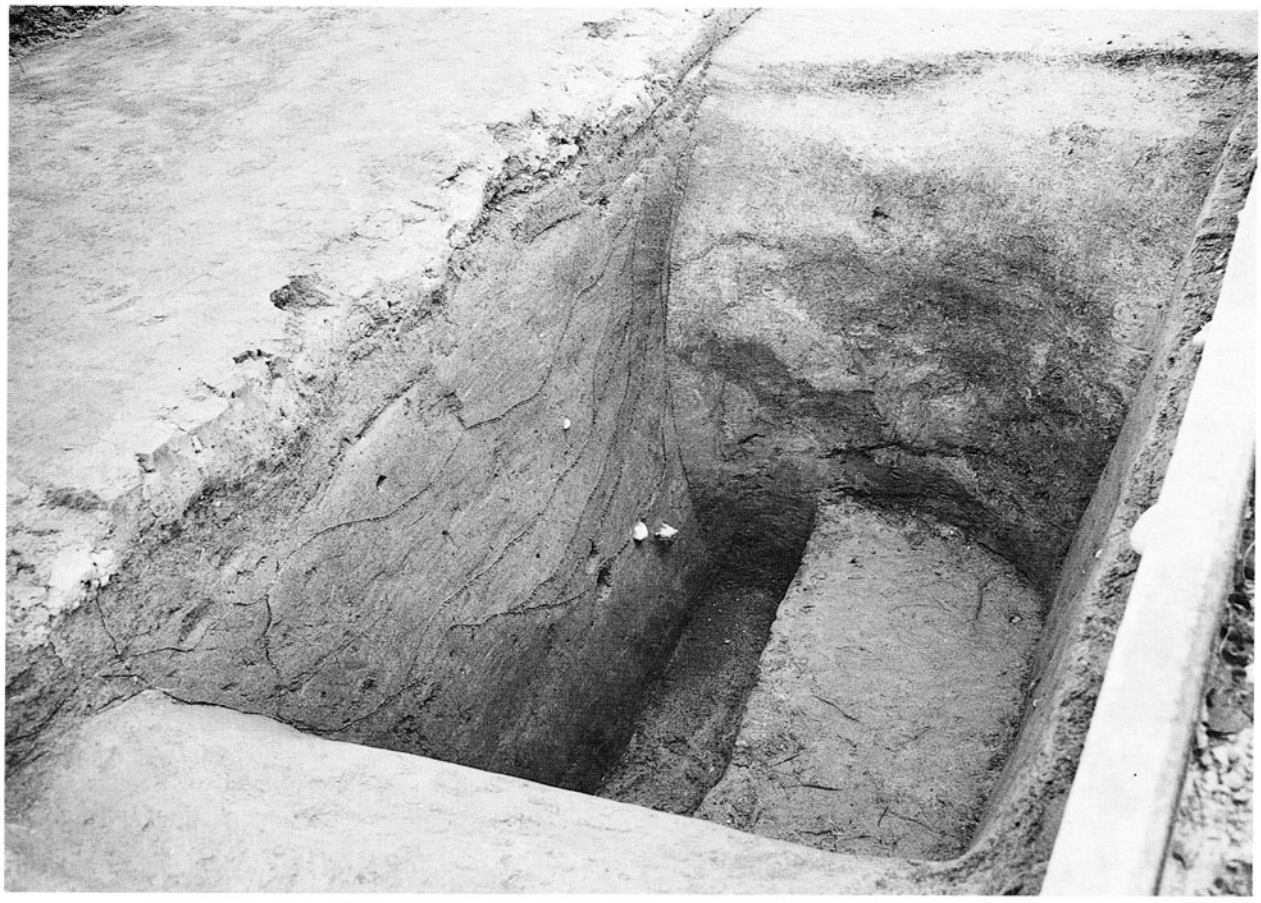
〈注〉
⑴　斎宮跡の土師器編年を主に参考とした。
「斎宮跡の土師器」（『三重県斎宮跡調査事務所年報1984　史跡斎宮跡発掘調査概報』　三重県斎宮跡調査事務所　1985年）
⑵　『奈良国立文化財研究所基準資料』Ⅱ　瓦編２　1975年
⑶　児玉道明・山田　猛「天華寺廃寺」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1980年）
山田　猛「天花寺廃寺」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1981年）
⑷　斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３－施釉陶器』1994年）
⑸　藤澤編年による。以下同じ。
藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」（『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第３号　1994年）
⑹　谷岡武雄「飯野・多気郡の条里制」（『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979年）
⑺　本報告「Ⅰ．位置と環境」
⑻　稲垣晋也「東海道古瓦の系譜㈠－伊賀・伊勢・志摩－」（『創立十周年記念皇學館大學史料編纂所論集』1989年）
⑼　倉田直純・田中久生「伊勢寺廃寺」（『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1990年）
⑽　御麻生薗廃寺以下３廃寺は下記の文献に拠った。
『松阪市史』第２巻　史料篇　考古，松阪市史編さん委員会　1978年
⑾　鈴木敏雄『三重県古瓦図録』　楽山文庫　1933年
⑿　『松阪市史』第１巻　史料篇　自然，松阪市史編さん委員会　1977年

写真図版 6

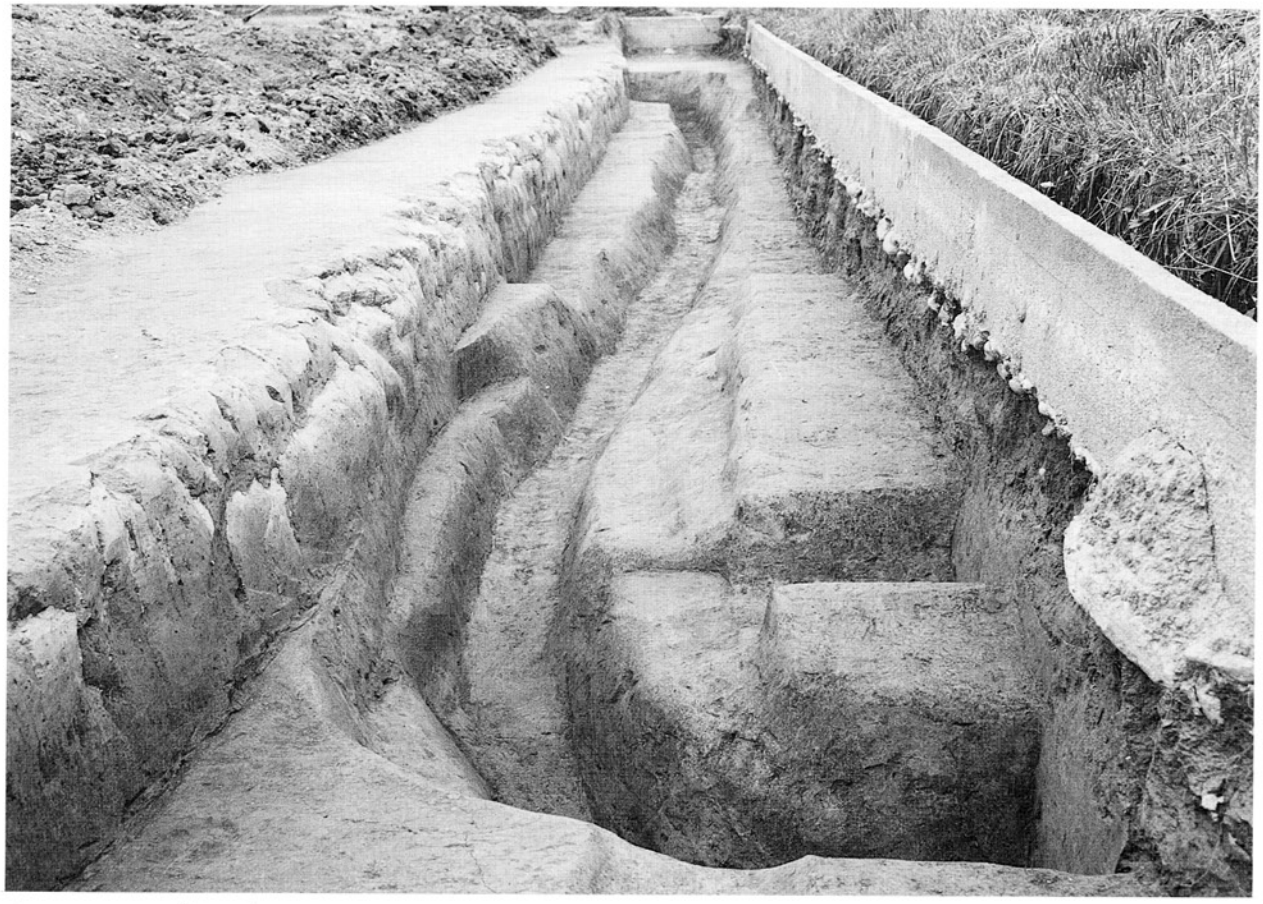


調査区全景（東から）

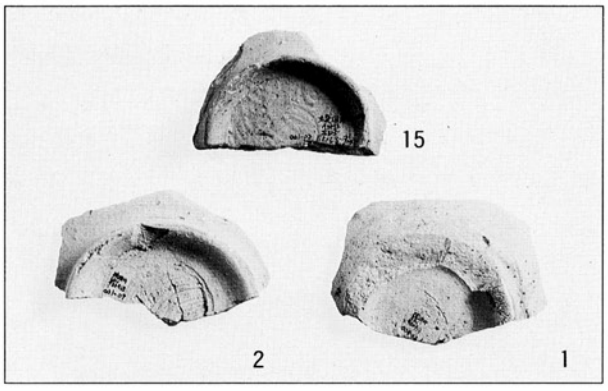
B・C地区全景（東から）

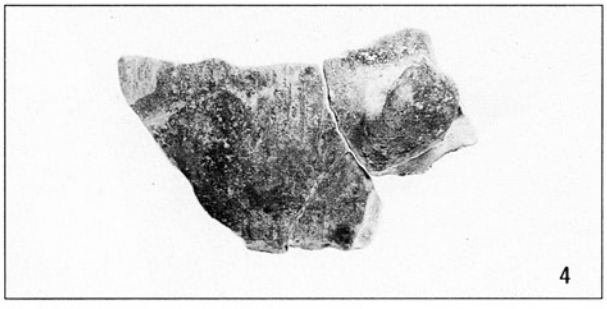


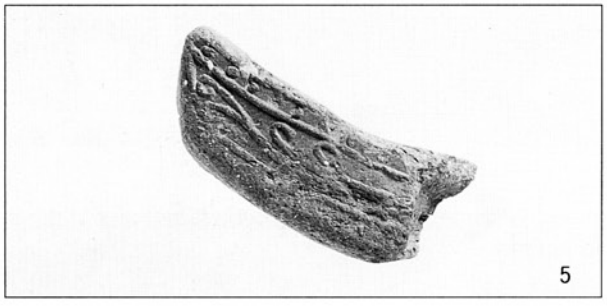
ＳＤ５（西から）

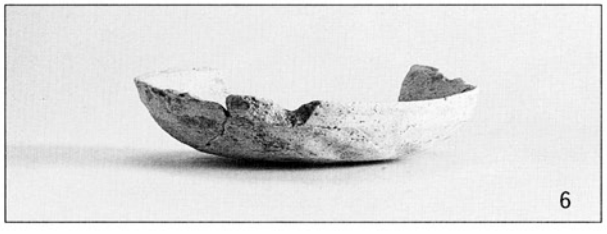


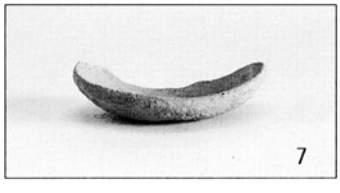
ＳＤ13・14・15（西から）

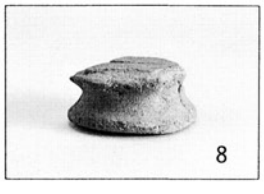


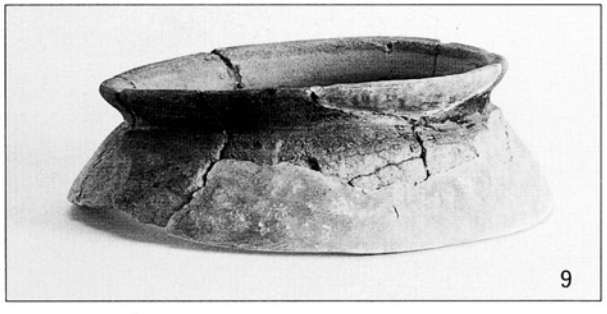


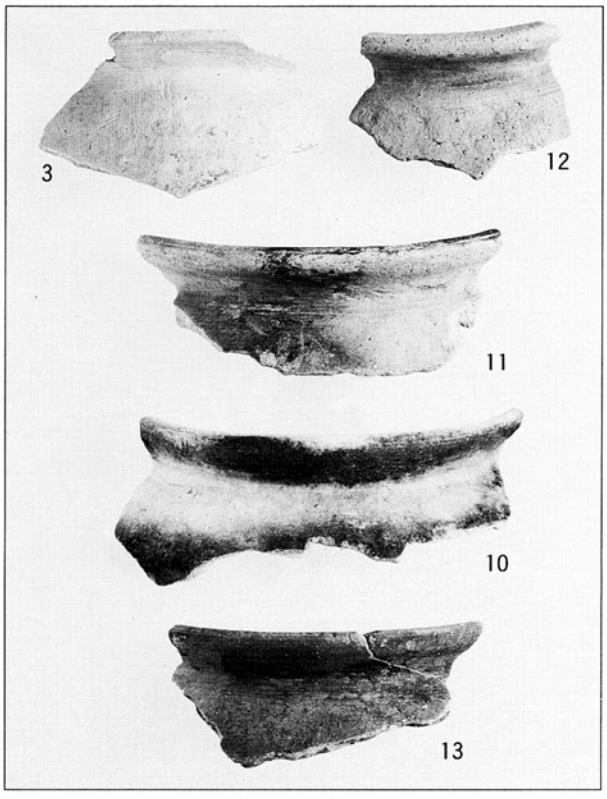


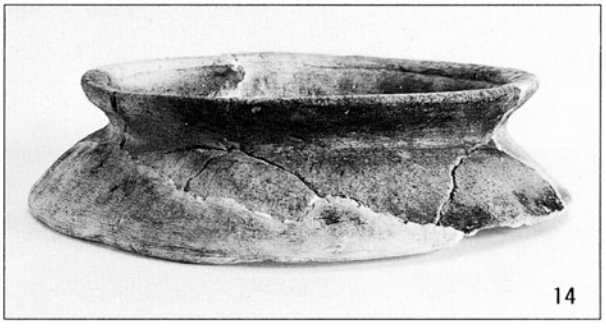


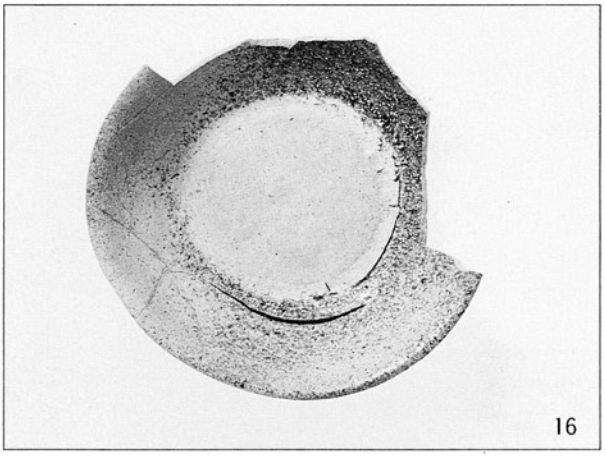


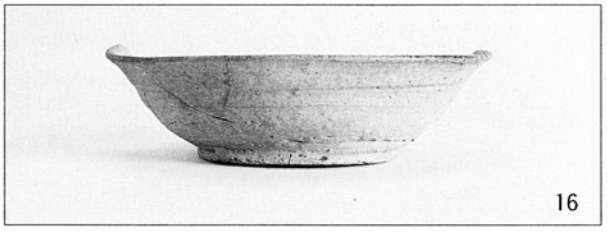






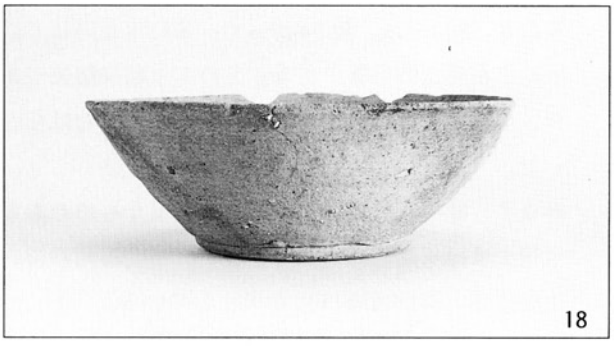


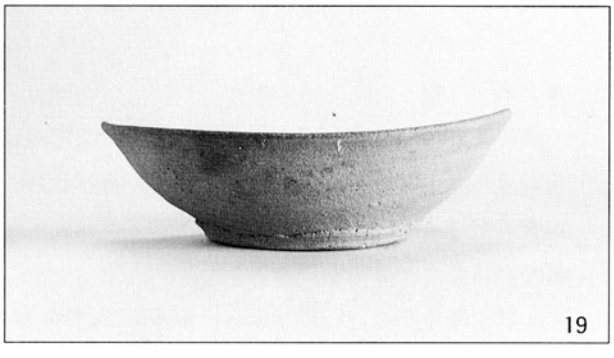


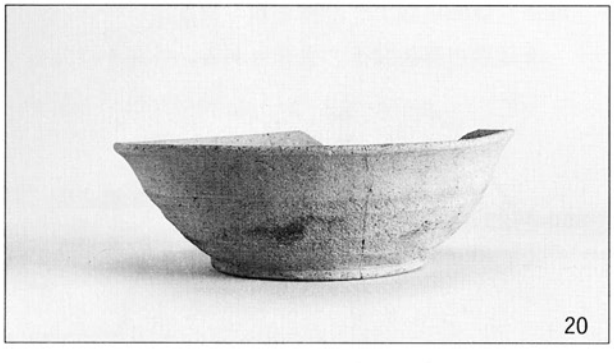


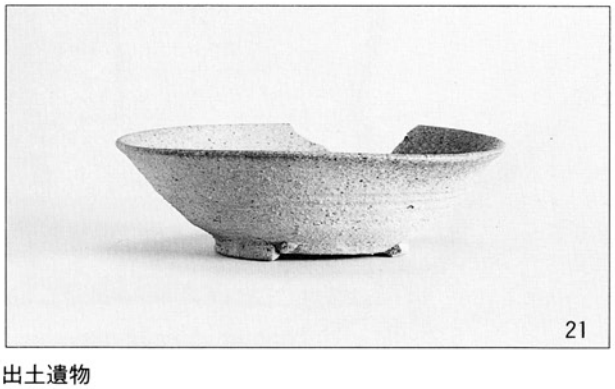
出土遺物

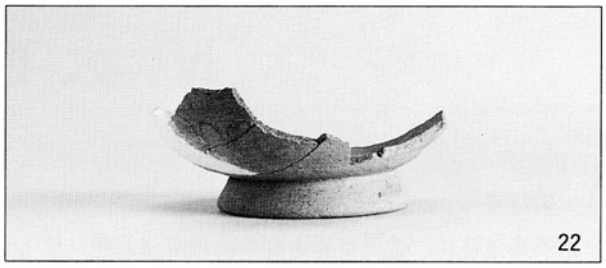
17

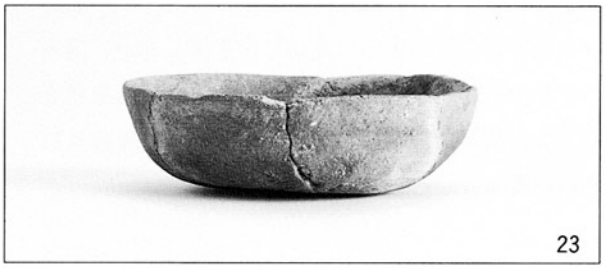

18

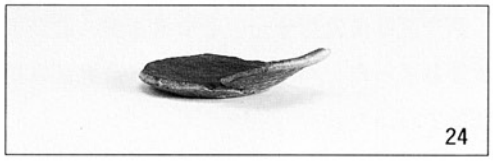

19

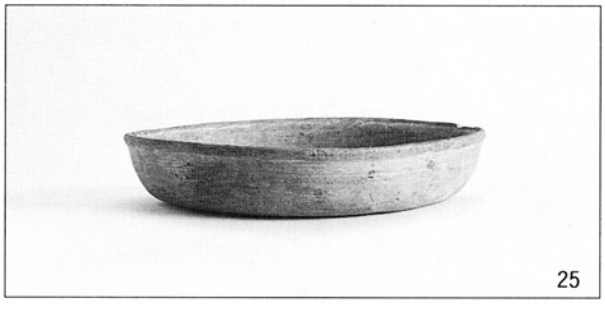

20

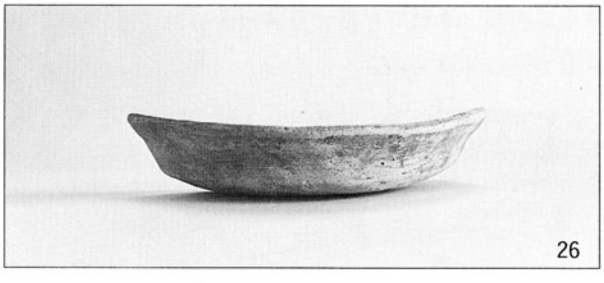

21

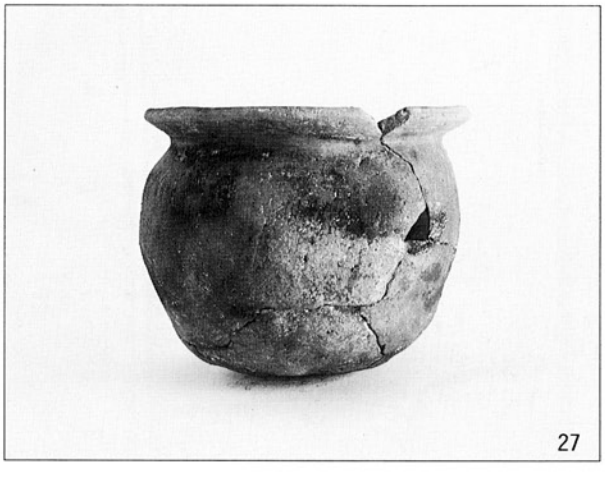

22


23


24


25


26


27

出土遺物

Ⅳ. 大蓮寺遺跡

1．はじめに

大蓮寺遺跡は、松阪市櫛田町の高畑集落北西に位置する。東側には大雷寺川、西側には現左岸第三幹線水路の存在に代表される小河川を配するが、周辺部よりやや標高が高く、比較的安定した立地条件を備える。遺跡面積は17,000㎡だが、調査対象地は用水路設置部分の約320㎡である。

2．層　序

調査区は農道部分が中心であるが、道路下は置き土が目立ったため、土層の観察は調査区南壁の水田部分で行った。

層序は耕作土下から、暗灰色粘質土（旧耕作土）、淡黄灰色粘質土（床土）、灰褐色粘質土（包含層）と続き、表土下約30㎝で遺構検出面（地山）に達する。地山は淡褐灰色管状斑紋入粘質土である。

3．遺　構

調査区の東側と西側で、計10条の溝を検出した。溝は東側に集中し、方向も概ね北東方向を示す。又、調査区西端に単独で存在する溝（ＳＤ10）は、ほぼ東西方向に伸びている。

ＳＤ１　幅1.2ｍ、深さ0.4ｍで、調査区内では最大の規模を持つ。堆積土は淡灰褐色粘質土の単層であり、飛鳥時代後期の須恵器長頸壺（第20図No.2）が出土している。

ＳＤ６　幅0.9ｍ、深さ0.2ｍで、ＳＤ１と同じく淡灰褐色粘質土の単層である。ＳＤ７と前後関係があり、切合関係はＳＤ７よりも古い。出土遺物はなかった。

ＳＤ７　幅0.2ｍ、深さ0.05ｍと小規模なものである。堆積土は淡灰褐色粘質土の単層で、平安時代初頭の土師器杯（第20図No.1）が出土している。

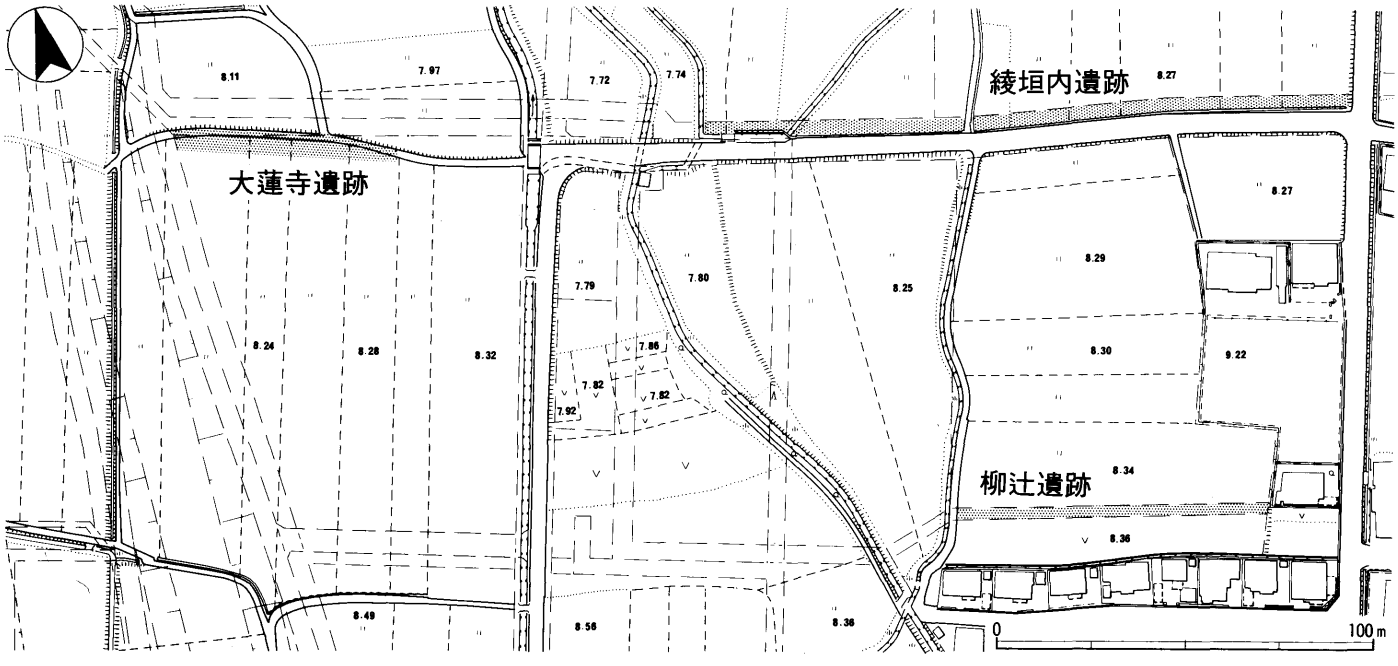
ＳＤ10　幅1.5ｍ以上、深さ約0.1ｍで、堆積土は暗灰色粘質土の単層である。遺物の出土はなかった。

4．遺　物

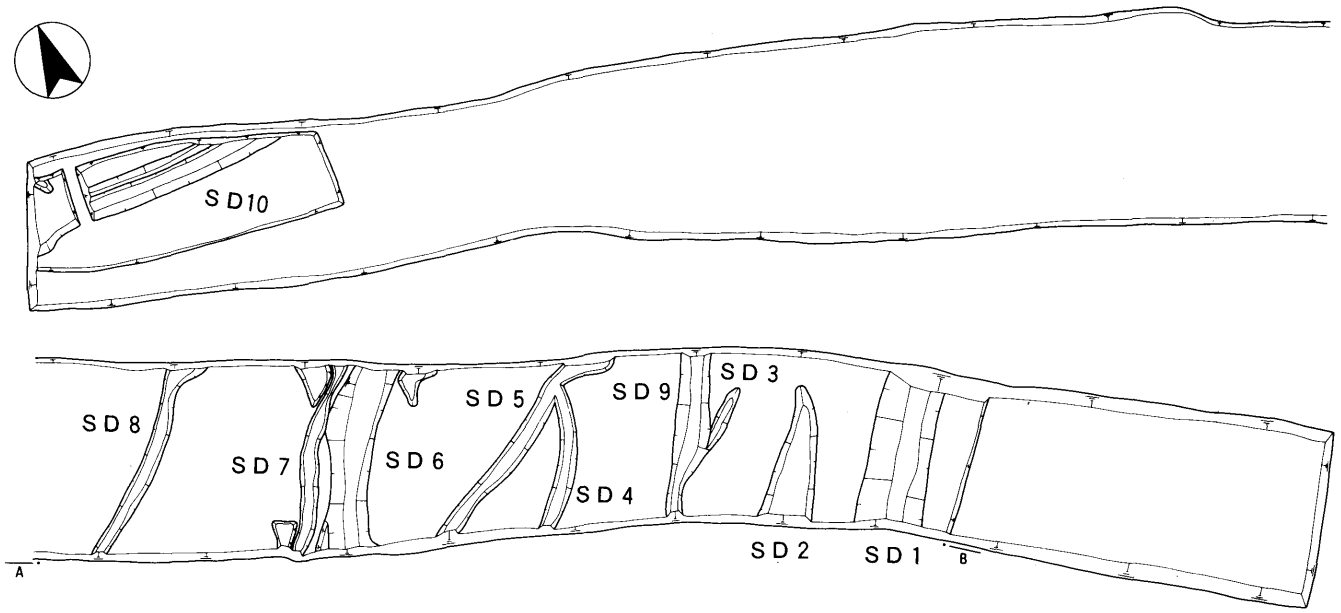
遺跡範囲には、土師器小片を中心とした遺物の分布が見られ、緑釉陶器片も確認されている。しかし調査における遺物の出土は寡少で、以下に報告するものがほとんどである。

１は土師器杯で、口径12.5㎝、器高3.6㎝である。底部の内外面は指押さえの後ナデ調整が、また口縁端部には強い横ナデが施されている。

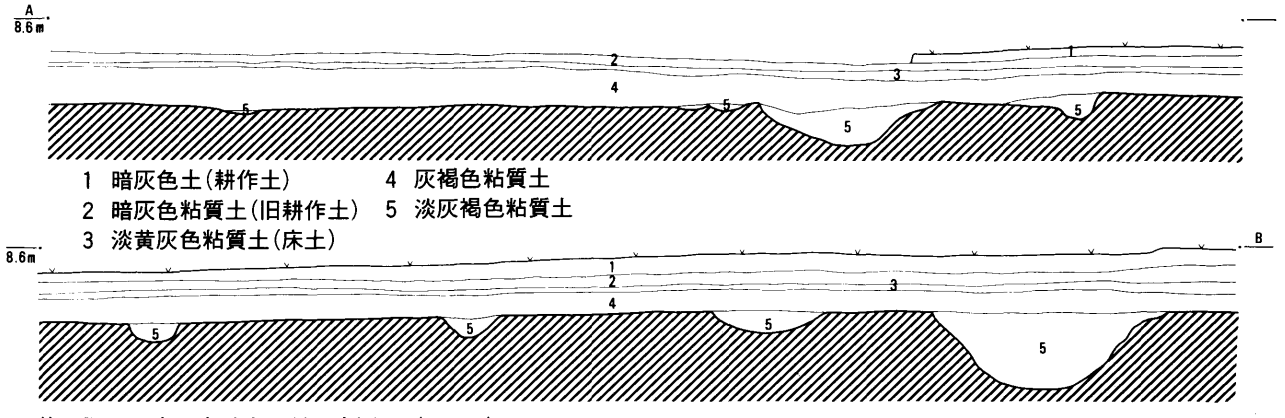
２は須恵器長頸壺の底部である。外向きに大きく



第17図　調査区位置図（１：2,000）



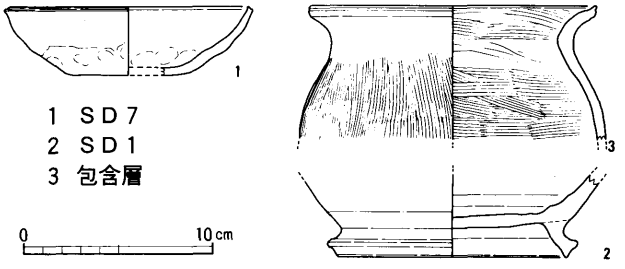
第18図　遺構平面実測図（1：200）



第19図　調査区南壁土層断面実測図（1：80）

広がる高台は、強いヨコナデによる端部調整がなされている。

3は包含層出土の土師器甕である。口縁端部は強い横ナデが施され、やや面を持って立ち上がる。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が成される。口径は15cmである。



第20図　出土遺物実測図（1：4）

5．結　語

「大蓮寺」という小字は、付近に残る「塔ノ本（とうのもと）」・「鏡付田（かねつきだ）」の字名とともに、寺院の存在を窺わせるものであるが、調査においてその根拠となるものはは何ら出土しなかった。

しかし、他の櫛田地区の遺跡では顕著ではなかった飛鳥時代から平安時代初頭の遺構が認められ、当該時期においても、周辺部において人々の営みがあったことがわかった。

なお調査地の東方、櫛田集落南側付近に推定地をもつ「大雷（だいらい）寺廃寺」[1]は、その名称の発音が「大蓮寺」と酷似している点が指摘される。しかし、瓦が集中して出土した推定地と今回の調査区は、直線距離で700m隔たる。また寺域も判然とせず、史料的にも存在を裏付けるものは認められない。両者は性格の異なる遺跡として考える必要があろう。

（宇河雅之）

(1)『松阪市史』第二巻　史料篇考古
（松阪市史編さん委員会、1978年）

調査前風景（東から）

調査区全景（東から）

V. 柳辻遺跡

1. はじめに

柳辻遺跡は、松阪市櫛田町の高畑集落北方に位置する。現況は水田である。遺跡面積は7,000㎡で、綾垣内遺跡とは条里界にあたる道路を挟んで隣接する。調査は遺跡範囲南端に設置される用水路部分（160㎡）を対象とした。

2. 層　序

層序は、調査区南壁で観察した。耕作土は黒灰色細砂混土で、以下淡褐色粘質土（床土）、淡褐灰色管状斑紋入シルト（遺構検出層）、明褐色粘土と続く。耕作土から遺構検出面は、およそ30cmである。

3. 遺構と遺物

調査区の西側において溝を２条確認した。

ＳＤ１　幅0.6～0.8m、深さ0.2～0.4mで調査区とほぼ平行に延びる。断面形は緩い丸底で、堆積土は灰白色粘質土の単層である。

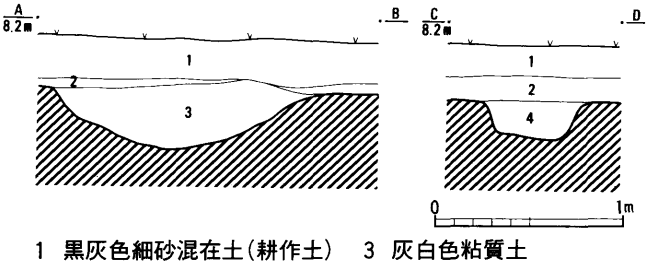
ＳＤ２　幅0.3m、深さ0.2mで、調査区とほぼ直交する。断面形は逆台形を示し、堆積土は暗灰褐色粘質土の単層である。

遺物としては、耕作土に山茶椀・土師器を中心とする中世土器片が認められた以外は、一切出土しなかった。

4. 結　語

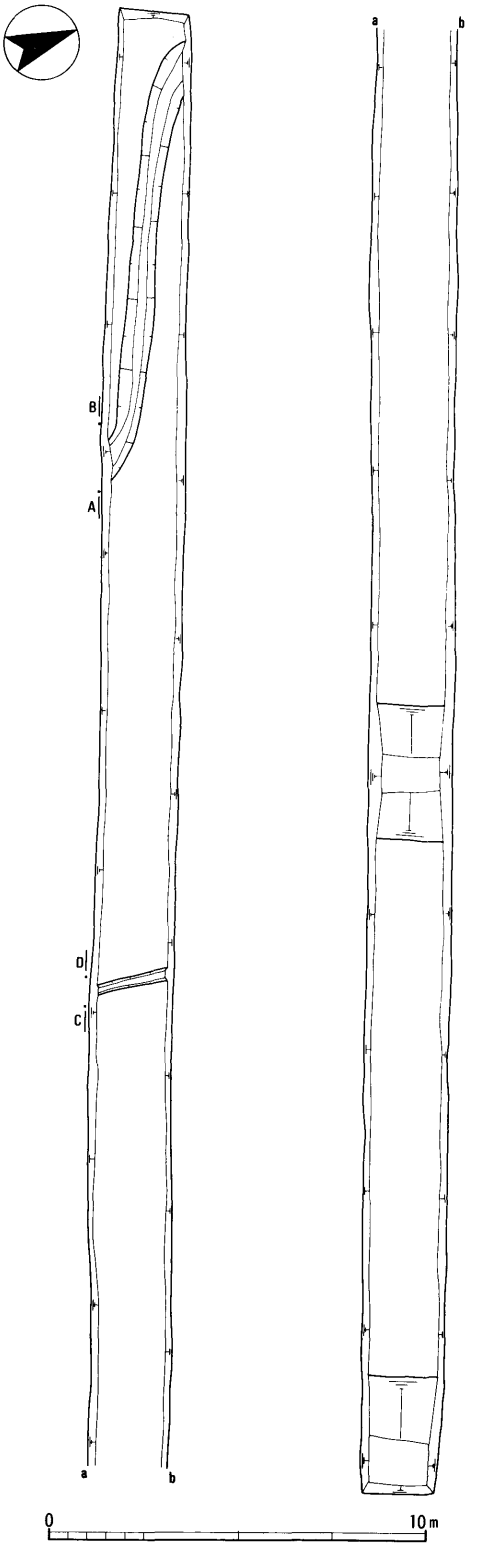
調査面積が狭く、また遺物の出土がなかったため遺跡の性格を明確にするには至らなかった。

しかし検出した２条の溝は、おおむね東西及び南北を示しており、こういった溝は、隣接する綾垣内遺跡や大蓮寺遺跡でも認められている。当地域に残る条里との関係が注目される。　（宇河雅之）



1 黒灰色細砂混在土（耕作土）　3 灰白色粘質土
2 淡褐色粘質土　4 暗灰褐色粘質土

第22図　ＳＤ１・２土層断面実測図（１：40）



第21図　遺構平面実測図（１：200）

Ⅵ. 北ノ垣内遺跡

1．はじめに

北ノ垣内遺跡は、松阪市清水町の集落南方に位置し、集落を迂回する様に河道の痕跡を残す旧櫛田川の左岸に立地する。

遺跡の面積は11,000㎡であり、調査対象地は用水路部分の770㎡である。調査区が南北２か所に分かれたため、便宜上北側をＡ地区、南側をＢ地区として報告する。

2．層序

基本層序は、Ａ・Ｂ地区ともに水田耕作土（黒灰色細砂混土）、床土（黄橙色粘土）と続き、次層の明黄褐色粘質土層直上が遺構検出面である。

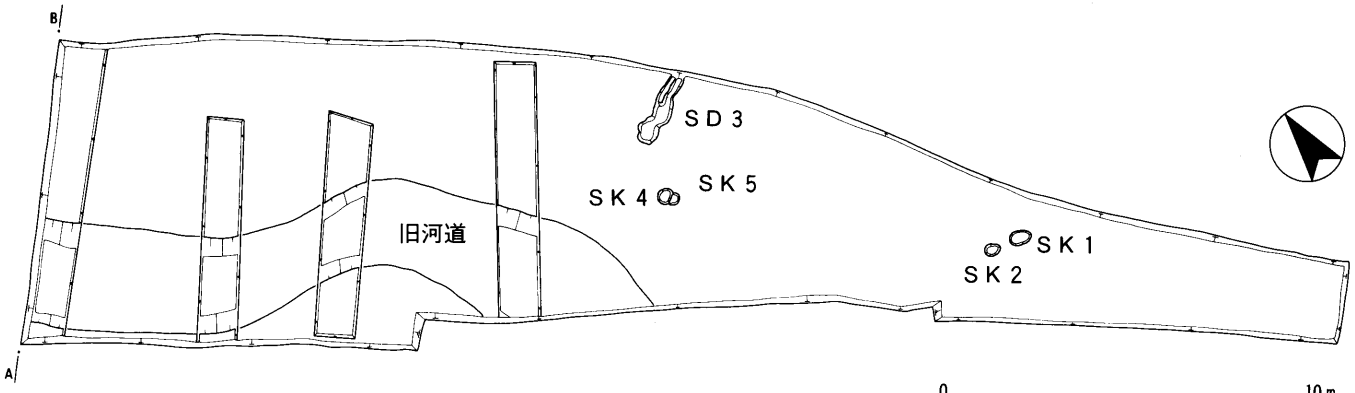
遺構検出面の深さは、耕作土から約30㎝である。

3．遺構

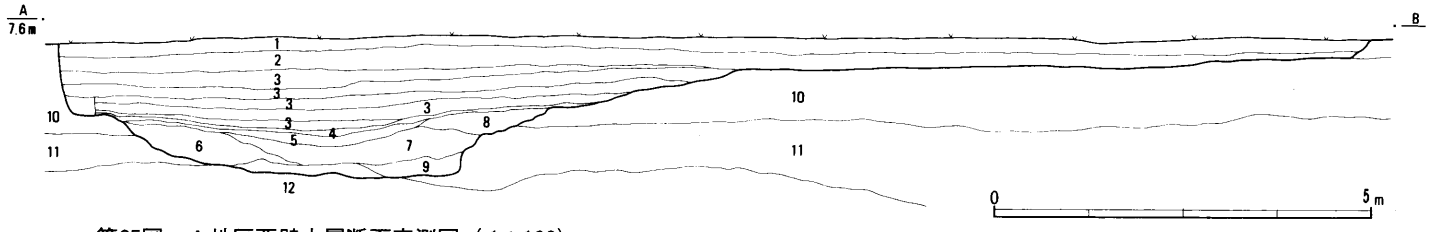
(1) Ａ地区

櫛田川の旧河道南側に位置するが、明黄褐色砂質土の安定した層を持つ。この層の直上が遺構検出面である。弥生時代中期・古墳時代初頭の溝や土坑を検出した他、調査区西側では小河川の存在が認められた。

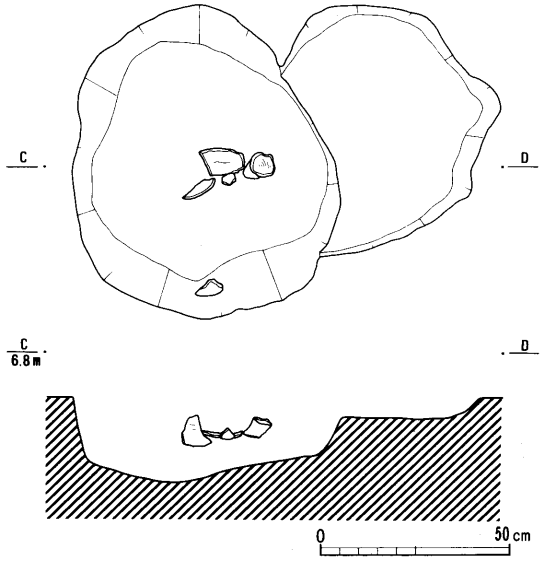
第23図　調査区位置図（１：2,000）



第24図　A地区遺構平面実測図（1：200）



第25図　A地区西壁土層断面実測図（1：100）



第26図　SK4・5遺物出土状況図（1：20）

1 黒灰色細砂混在土（耕作土）
2 黄橙色粘質土（床土）
3 灰褐灰土（上部に鉄分沈着）
4 褐色土（上部に鉄分沈着）
5 暗褐灰色粘質土に褐灰色土混在
6 褐灰色砂に褐灰色粘質土ブロック混在
7 灰褐色粘質土（灰色砂レンズ層入る）
8 褐灰色土
9 褐灰色粘質土
10 明黄褐色砂質土
11 明黄褐色粘質土
12 淡灰黄色砂

①弥生時代中期の遺構

SD3　幅約0.8m、深さ約0.3mの溝で、調査区の中央北側に位置する。北東方向の調査区外へ延びるものと思われる。壺口縁（第31図No.2）が出土している。

SK4　直径1.7m、深さ0.4mの円形で、底から浮いた状態ではあるが、壺が出土している。

②古墳時代前期の遺構

SK1　調査区の東端に位置し、直径1m、深さ約0.25mの楕円形である。

③その他の遺構

SD5　幅約5.5m、深さ約1.5mである。溝の底には水流の存在を物語るシルト・砂・粘土の互層が認められる。また、灰褐色シルト層とその直上のマンガン沈着層の互層は、植物の生息と土の堆積がくり返しあったことを裏付けるものである。出土遺物はない。櫛田川の旧河道に伴う小河川であったと考えられる。

(2)　B地区

A地区の南約100mに位置する。東西に細長い調査区は、幅3m、延長は約100mである。

遺構検出面は、明黄褐色粘質土（マンガン斑紋入

る）の安定した層の直上である。

遺構は、調査区の東側と西側に集中し、中央部付近は低湿地が存在したと考えられる。

①弥生時代の遺構

ＳＤ７　調査区の東側に位置し、幅約2.4ｍ、深さは約0.3ｍである。堆積土には、砂層と粘質土層の互層が認められ、両者が同時に存在していた可能性がある。

ＳＤ６　ＳＤ７の東側に位置し、幅約1.8ｍ、深さは約0.2ｍである。ＳＤ７と同様に砂層と粘質土層の互層が認められ、両者が同時に存在していた可能性がある。

②古墳時代前期の遺構

ＳＤ１　幅2.6ｍ、深さ0.24ｍで、南北方向の流れをもつ。堆積土は、暗褐色粘質土の単層である。

ＳＫ９　直径0.6～0.7ｍの楕円形である。土坑の中央で直口壺が直立した状態で出土した（第31図No.９）。ＳＤ２との切合関係は、ＳＫ９が新しい。

③古墳時代後期の遺構

ＳＤ２　調査区の西端に存在する溝で、幅0.7ｍ、深さ0.25ｍである。鉤の手状に延びる。ＳＫ９や時期不明のＳＤ８との切合関係はＳＤ２が新しい。

ＳＤ５　調査区の東端に位置し、東西方向の流れをとる。幅1.7ｍ、深さ0.2ｍである。

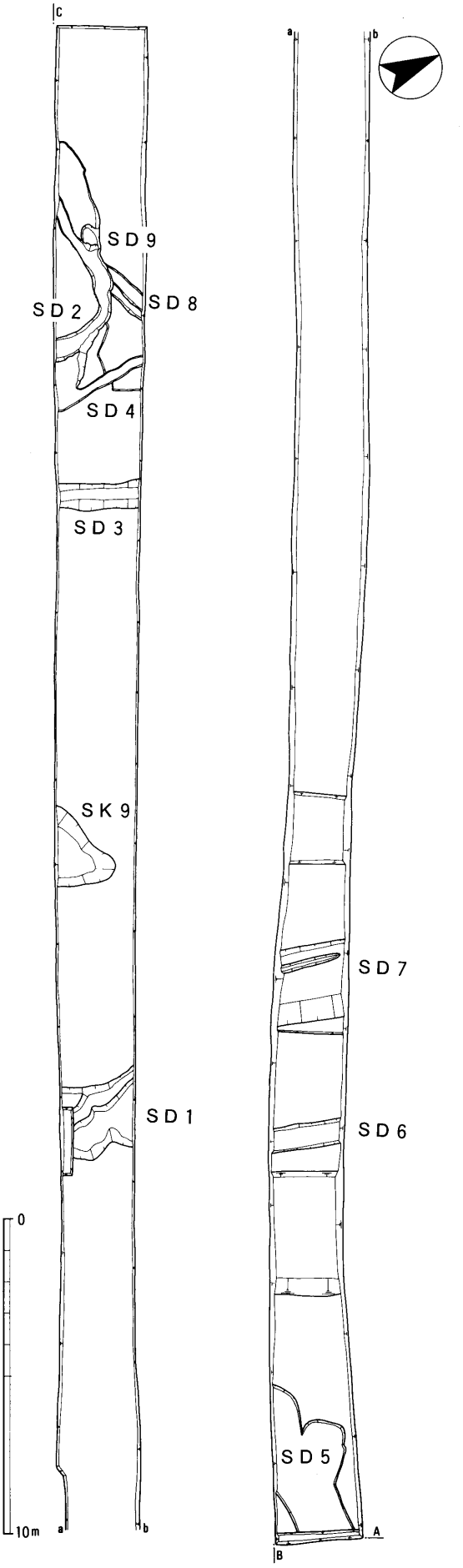
④低湿地

調査区中央部付近には、低湿地が存在したと考えられる。この湿地帯は、1.3ｍの深さを持つもので、幅は調査区南壁で観察する限り東西50ｍに及ぶと思われる。堆積土の大半を占める淡褐色シルト層は直上にマンガンの沈着層を持ち、くり返し存在する。堆積回数は、マンガンの沈着数から４回以上認められる。これは、植物の生息と流入土の堆積がくり返されたことを示し、長期間かけて湿地帯が埋まったことを意味する。

４．遺物

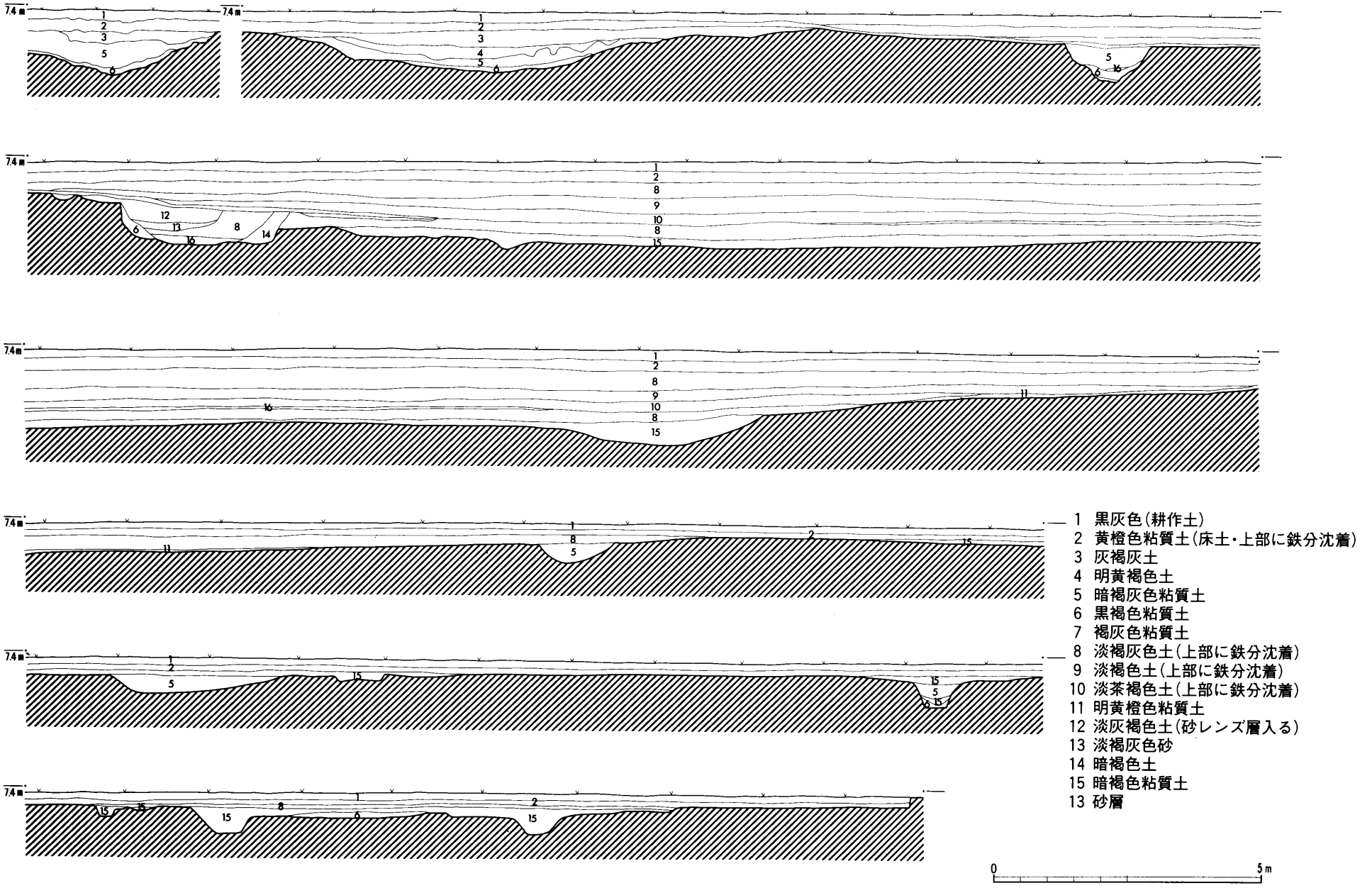
(1)　弥生時代中期の土器

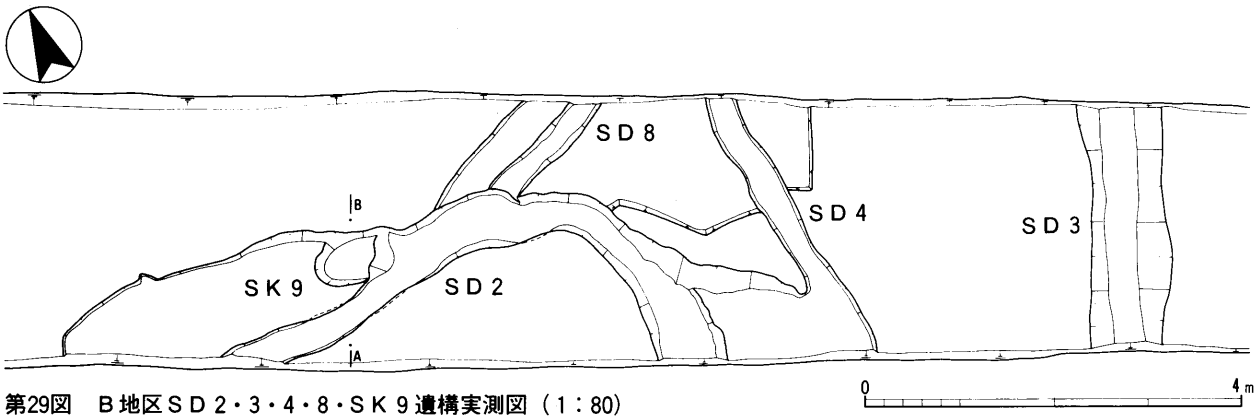
壺（１～６）１は細頸壺であり、櫛描直線紋に縦位直線紋を組み合わせる。櫛描紋の上下には弱い沈線を施す。複帯は３段以上である。（ＳＫ４出土・第26図）２は太頸壺で下方に拡張された口唇部に沈線を巡らし、後にヘラ状工具による刻みを施す。



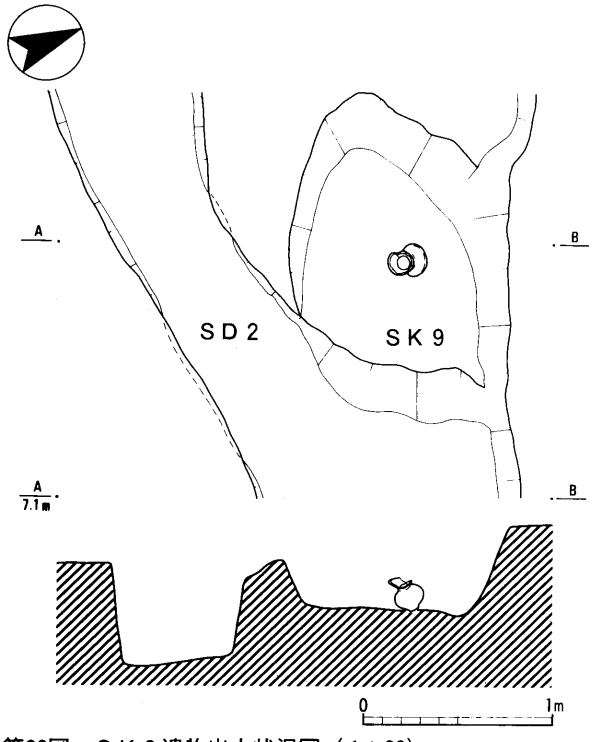
第27図　Ｂ地区遺構平面実測図（１：200）

第28図　B地区（南壁）土層断面実測図（1：100）





第29図　B地区ＳＤ２・３・４・８・ＳＫ９遺構実測図（１：80）



第30図　ＳＫ９遺物出土状況図（１：20）

（A地区ＳＤ３出土）３は広口壺の頸部で、櫛描横線紋と櫛状工具による刺突が見られる。４は体部に貼り付けられた３条の凸帯で刻みがある。５は櫛描横線紋が施された体部片である。３～５はＢ地区のＳＤ２出土である。６は底部で内外面は荒い削りが施される。（ＳＤ６出土）。

⑵　弥生時代後期の土器

台付甕台部（７）外面は刷毛目調整、内面はナデ調整が施される。摩滅が著しい（ＳＤ２出土）。

短頸壺（８）口縁部は外反する傾向が見られ、頸部には櫛描横線を一条巡らせる（ＳＤ７出土）。

⑶　古墳時代前期の土器

短頸壺（９）口縁部は内反し、外面は刷毛調整の後ミガキが施される。底部は平底で、中央部がやや窪む（ＳＤ２出土）。

台付甕（10）口縁部の屈曲はあまり明瞭でなく、端部は肥厚化している（ＳＤ３出土）。

短頸壺（11）口縁部はやや外反する傾向にあるが、直口に近い。外面は縦方向、口頸部内面は横方向のミガキが施される（ＳＤ２出土）。

甕（12・13）12は内外面ともに刷毛目調整。13は外面が削り、内面は刷毛目調整している。摩滅が著しく、調整は不明瞭（ＳＤ２出土）。

⑷　古墳時代後期の土器

須恵器杯身（14）内面及び体部外面の調整はロクロナデで、底部はヘラキリ不調整である（ＳＤ５出土）。

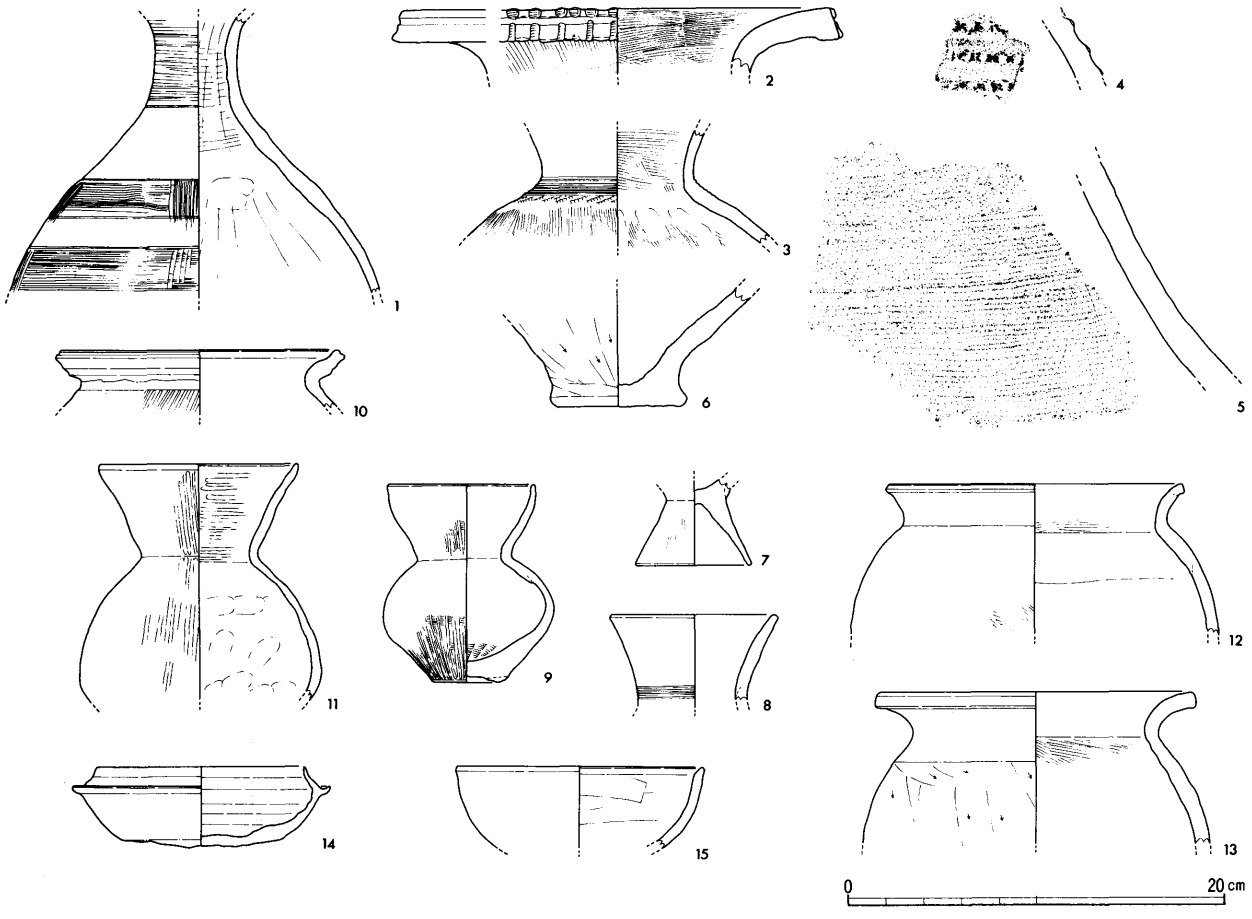
土師器杯（15）口縁部内面には強いヨコナデでによる「面」が見られる。内面は板状工具で撫でたような調整が施される（ＳＤ７出土）。

５．結語

今回の調査において検出した遺構は、溝や土坑が中心で、遺跡の性格を明確にする資料は得られなかった。しかし、遺跡の南北端に相当するＡ・Ｂ地区で、弥生時代中期に遡る土器が出土したことは、当該地域における定住の開始時期を知る手がかりができたと言える。これは同時に「水田」の存在をも考えさせるものであり、興味深い点である。

一方、調査区内で検出した溝は、概ね弥生時代のものが南北方向、古墳時代のものが東西方向に延びる傾向がある。これらの溝が自然のものなのか、或いは人為的なものなのか、判断に苦しむところがあるが、その時々で流れを変更していた旧櫛田川の流路方向と関連性があるのかも知れない。

（宇河雅之）



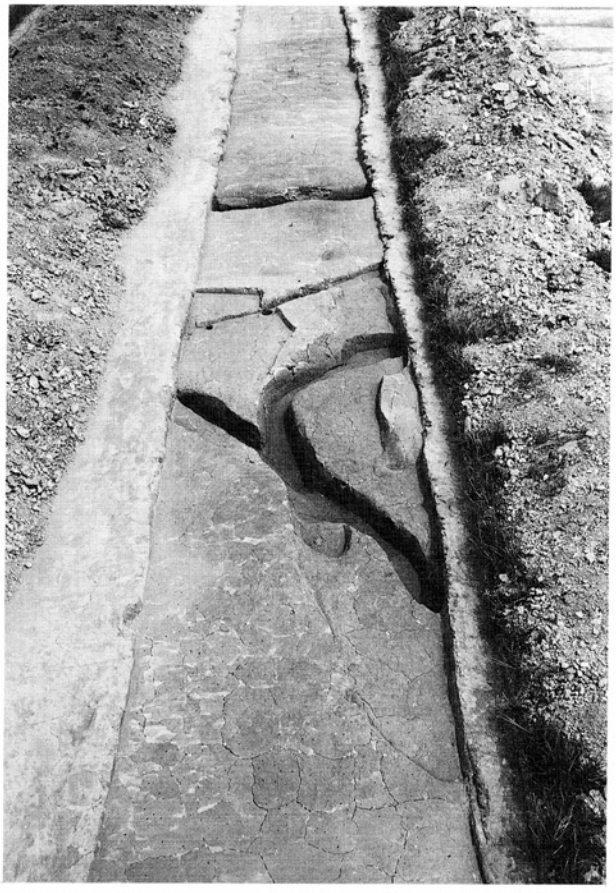
第31図　出土遺物実測図（1：4）

No.	遺構	器種	調整技法の特徴	法量(cm)	色調	焼成	胎土	残存度	備考	登録番号
1	SK4 A地区	弥生土器 細頸壺	外　櫛描横線文に縦位直線文を組み合わす複帯を3段以上配する。 内　頸部に横方向の刷毛調整、体部はなでナデ調整	残存高14.3cm	外7.5YR 8/4 内2.5Y 6/1	並	やや密 砂粒多含	頸部と体部1/4	磨耗により調整不明瞭	004-02
2	SD3 A地区	弥生土器 広口壺	外　口唇部に沈線・建方向のキザミを施す。頸部に建方向の刷毛調整(5本／1cm) 内　横方向の刷毛調整(9本／1cm)	口径　22.3cm (復元)	外5YR 8/4 内2.5Y 8/2	並	やや密 微砂粒多含	口縁残存1/8		004-03
3	SD2 B地区	弥生土器 広口壺	外　頸部に櫛描横線・櫛状工具による刺突。体部は縦方向の刷毛調整(8本／1cm) 内　頸部横方向の刷毛調整(7～8本／1cm)	残存高 5.5cm	外7.5YR 8/4 内7.5YR 8/6	並	やや密 砂粒含	頸部1/2		002-03
4	SD2 B地区	弥生土器 壺	外　等間隔のキザミを施した凸帯3条		外7.5YR 8/3 内7.5YR 8/3	並	粗　小石 ・砂粒含	体部小片	磨耗により調整不明瞭	003-02
5	SD2 B地区	弥生土器 壺	外　櫛描横線文(櫛状工具幅9本／3.3cm) 内　ナデ調整	厚さ　1.3cm	外7.5YR 7/3 内7.5YR 8/2	並	粗　小石 ・砂粒含	体部片	磨耗により調整不明瞭	003-01
6	SD6 B地区	弥生土器 壺	外　底部及び体部下方ケズリ調整 内　ケズリ調整	底　部　径 6.4cm	外5YR 7/4 内5YR 7/4	並	粗　砂粒 多含	底部2/3	磨耗により調整不明瞭	002-01
7	SD2 B地区	弥生土器 台付甕	外　刷毛調整 内　ナデ調整	底部径6.0cm	外7.5YR 7/6 内7.5YR 7/4	並	密　砂粒 少量含	底部のみ残存	磨耗により調整不明	001-05
8	SD7 B地区	弥生土器 短頸壺	外　頸部に4条の櫛描横線。調整不明瞭 内　調整不明瞭	口径　8.6cm 残存高 6.8cm	外2.5YR 8/1 内2.5YR 8/1	並	密　砂粒 少量含	頸部のみ残存	磨耗により調整不明	001-03
9	SD2 B地区	土師器 短頸壺	外　刷毛調整のちミガキ調整 内　刷毛調整のちナデ調整	口径　7.6cm 比高　10.5cm	外7.5YR 8/4 内10YR 8/4	並	密　砂粒 少量含	ほぼ完形	磨耗により調整不明。黒斑あり	001-04
10	SD2 A地区	土師器 台付甕	外　刷毛調整。口縁部の強い横ナデ。端部に沈線。 内　ナデ調整	口径　14.5cm 残存高 3.0cm	外7.5YR 8/4 内10YR 8/4	並	やや密 砂粒含	口縁部 1/4		004-04
11	SD2 B地区	土師器 短頸壺	外　縦方向のミガキ調整 内　口縁～頸部、横方向ミガキ調整。体部ナデ調整	口径　10.4cm 残存高12.6cm	外10YR 8/3 内10YR 8/3	並	密　微砂 粒含	1/2	反転復元	004-01
12	SD2 B地区	土師器 甕	外　口縁横方向ナデ調整。体部刷毛調整 内　口縁横方向ナデ調整。頸部に若干刷毛調整痕	口径　15.4cm (復元)	外2.5YR 8/3 内7.5YR 4/2	並	やや密 砂粒含	口縁部 1/8	著しい磨耗により調整不明瞭。反転復元	002-04
13	SD2 B地区	土師器 甕	外　口縁横方向ナデ調整。体部ケズリ調整か 内　口縁・体部ナデ調整。頸部に若干刷毛調整痕	口径 165.cm (復元)	外7.5YR 7/3 内7.5YR 6/1	並	粗　砂粒 多量含	口縁部 1/3	反転復元	002-02
14	SD5 B地区	須恵器 杯身	外　杯部ロクロナデ。底部ヘラ切り不調整 内　杯部・底部ロクロナデ	口径　10.8cm 器高　4.3cm	外N 7/0 内N 7/0	良	密　砂粒 少量含	完形		001-01
15	SD7 B地区	土師器 杯身	外　口縁部横方向の強いナデ調整。杯部ナデ調整。 内　杯部板状工具によるナデ調整。	口径 12.9cm 残存高 4.4cm	外5YR 7/6 内5YR 7/6	並	密　砂粒 少量含	口縁部 1/7	反転復元	001-02

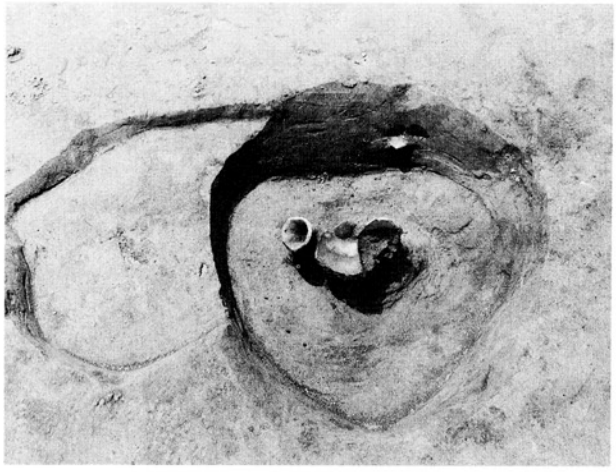
表2　北ノ垣内遺跡・出土遺物観察表

A地区調査区全景（東から）

B地区調査区全景（東から）

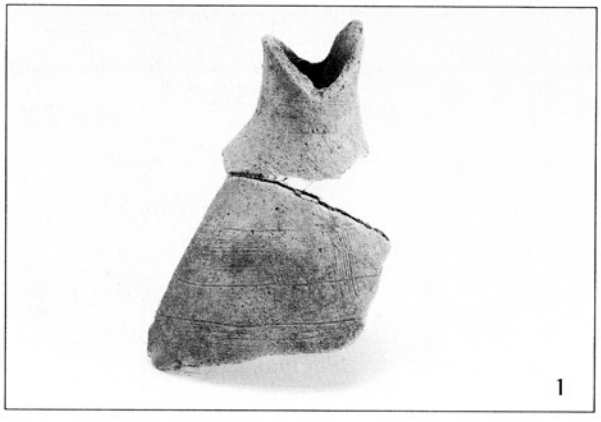


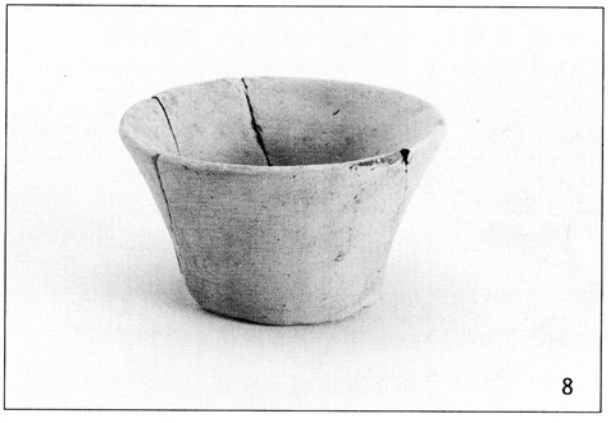
B地区調査区西端遺構群（西から）

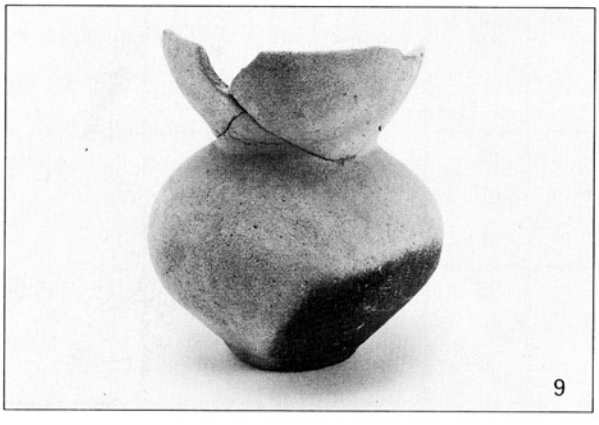


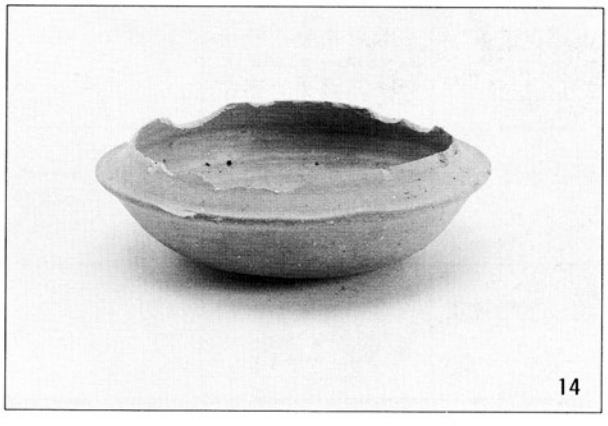
A地区ＳＫ４遺物出土状況（東から）

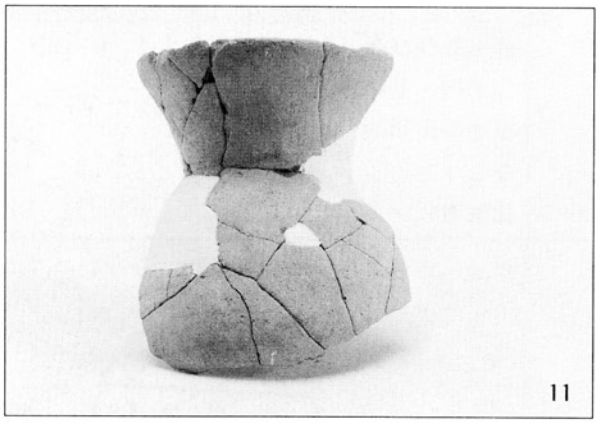
B地区ＳＫ９遺物出土状況（西から）

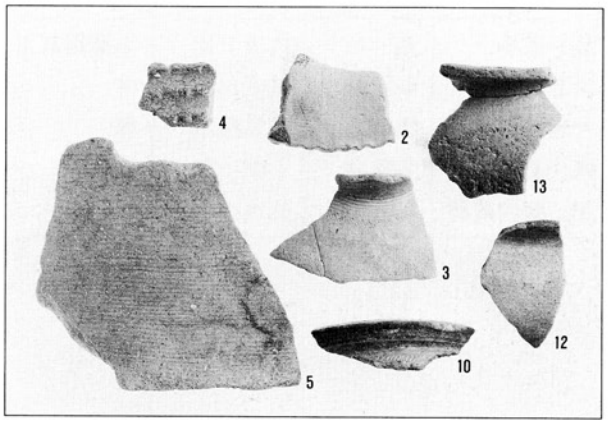












出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	せぼしいせき　あやがいといせき　だいれんじいせき　やなつじいせき　きたのがいといせき
書名	瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡
副書名	
巻次	第2分冊
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	133-2
編著者名	宇河雅之　袖岡直樹
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL05965-2-1732
発行年月日	西暦　1996年　3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
瀬干遺跡	三重県松阪市櫛田町字瀬干・一ノ坪	24204	——	34°33′13″	136°35′05″	19950807～19951005	580	平成7年度県営ほ場整備事業（櫛田地区）
綾垣内遺跡	三重県松阪市櫛田町字綾垣内・極原	24204	——	34°33′00″	136°35′10″		300	
大蓮寺遺跡	三重県松阪市櫛田町字大蓮寺・粟田	24204	——	34°32′55″	136°35′04″		320	
柳辻遺跡	三重県松阪市櫛田町字柳辻	24204	——	34°32′53″	136°35′13″		160	
北ノ垣内遺跡	三重県松阪市櫛田町字北ノ垣内	24204	——	34°33′12″	136°35′18″		770	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬干遺跡	墓	古墳前期	方形周溝墓	壺・ヒサゴ壺・台付甕	ＳＸ2は「B₁型墳」
綾垣内遺跡	集落跡	平安	溝	山茶椀・土師器鍋	
大蓮寺遺跡	集落跡	飛鳥後半	溝	須恵器長頸壺	
柳辻遺跡	集落跡	不明	溝	なし	
北ノ垣内遺跡	集落跡	弥生中期	溝・土坑	弥生壺	

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 133-2

瀬干遺跡・綾垣内遺跡
大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡

1996年3月29日発行
編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　㈲第一プリント社